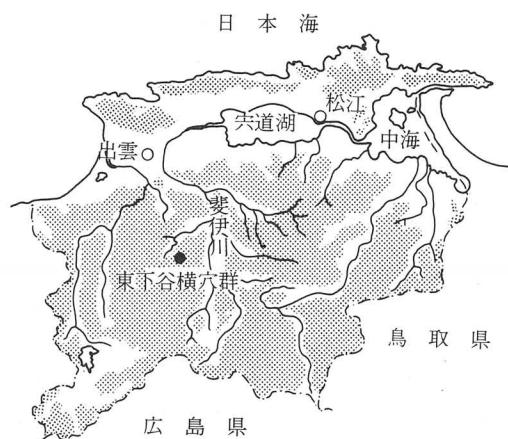


# 東下谷横穴群発掘調査報告書

1984年3月

島根県 三刀屋町教育委員会

# 東下谷横穴群発掘調査報告書



1984年3月

## 島根県 三刀屋町教育委員会

## 序

このたび県道出雲・仁多線の改修にあたり、東下谷地区から横穴群が発見され、その調査を手がけたところ、4体のほぼ完全な人骨をはじめ、大刀、土器等多数の出土品が、きわめて良好な状態で発見されました。

ご承知のように、本町には宮田遺跡・松本古墳群・太田横穴群等々、繩文時代から古墳時代にかけての周知の遺跡が数多くあります。

東下谷にも以前から、地元の人々により古墳の所在が伝えられていましが、これ程の規模でしかも貴重な遺物の発見は予想外であり、本町の歴史にまた新しい知見を得ました。

近年、本町は年ごとに貴重な文化財が発見・発掘され、史跡の町として脚光を浴びていますが、さらにこの調査により、本町の古代史に新しい1ページが加わることをうれしく思います。

終りになりましたが、調査にあたりご指導、ご協力を賜わりました島根県教育委員会、鳥取大学医学部をはじめ、土地所有者、工事関係者の各位に深甚な謝意を表します。

昭和59年2月22日

三刀屋町教育委員会

教育長 古瀬 明

## 例　　言

1. 本書は、島根県飯石郡三刀屋町中野地内の県道出雲・仁多線拡幅工事に際し発見された横穴群の発掘調査の報告である。

2. 調査は、三刀屋町教育委員会が主体となり、昭和58年8月1日から8月12日、9月8日から9月15日までの延べ18日間を費した。調査体制は以下のとおりである。

調　　査　員　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）

　　広江耕史（島根県教育文化財団文化財主事）

調査補助員　原　俊一（国学院大学学生）　西村隆博、藤原友子

調　　査　指　導　山本　清（島根大学名誉教授）　井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）

　　松本岩雄（島根県教育委員会文化課主事）　西尾克己（同）

　　勝部　衛（出雲玉作資料館）

調　　査　協　力　三宅博士（八雲立つ風土記の丘資料館）　赤沢秀則（鹿島町教育委員会）

事　　務　局　福間末年（三刀屋町教育委員会教育次長）

　　草水晴元（三刀屋町教育委員会主幹）

　　加藤陽一（三刀屋町教育委員会社会教育指導員）

3. 調査にあたっては、広沢英雄、森山崇、木次元市の諸氏および有限会社入沢建設工業に協力を得た。遺物整理および作図、製図、写真撮影には、吉富恭子、藤原友子、岩田靖、菅井一弘が参加した。

4. 本文は、草水、西尾、杉原、広江が分担執筆し、広江が編集を行なった。

図版・写真撮影は、杉原、広江がこれにあたった。

5. 挿図中の方位は磁北を指す。

6. 出土品は、現在三刀屋町永井記念館において保管している。

# 目 次

## 序

I 調査に至るいきさつ .....	1
II 歴史的環境 .....	2
III 東下谷横穴群の概要 .....	4
4号穴 .....	4
5号穴 .....	10
6号穴 .....	17
IV 小 結 .....	28
付編 東下谷横穴群出土の人骨について .....	30

## 挿 図 目 次

第 1 図 東下谷横穴群の位置図 .....	1
第 2 図 東下谷横穴群と周辺の主要遺跡 .....	3
第 3 図 東下谷横穴群配置図 .....	5
第 4 図 東下谷 4 号横穴実測図 .....	7
第 5 図 東下谷 4 号横穴出土遺物実測図 .....	9
第 6 図 東下谷 5 号横穴実測図 .....	11
第 7 図 東下谷 5 号横穴出土遺物実測図(1) .....	14
第 8 図 東下谷 5 号横穴出土遺物実測図(2) .....	15
第 9 図 東下谷 6 号横穴実測図 .....	18
第10図 東下谷 6 号横穴遺物出土状況 .....	19
第11図 東下谷 6 号横穴出土遺物実測図(1) .....	23
第12図 東下谷 6 号横穴出土遺物実測図(2) .....	24
第13図 東下谷 6 号横穴出土遺物実測図(3) .....	25
第14図 東下谷 1 号横穴実測図 .....	27
第15図 東下谷 3 号横穴実測図 .....	27

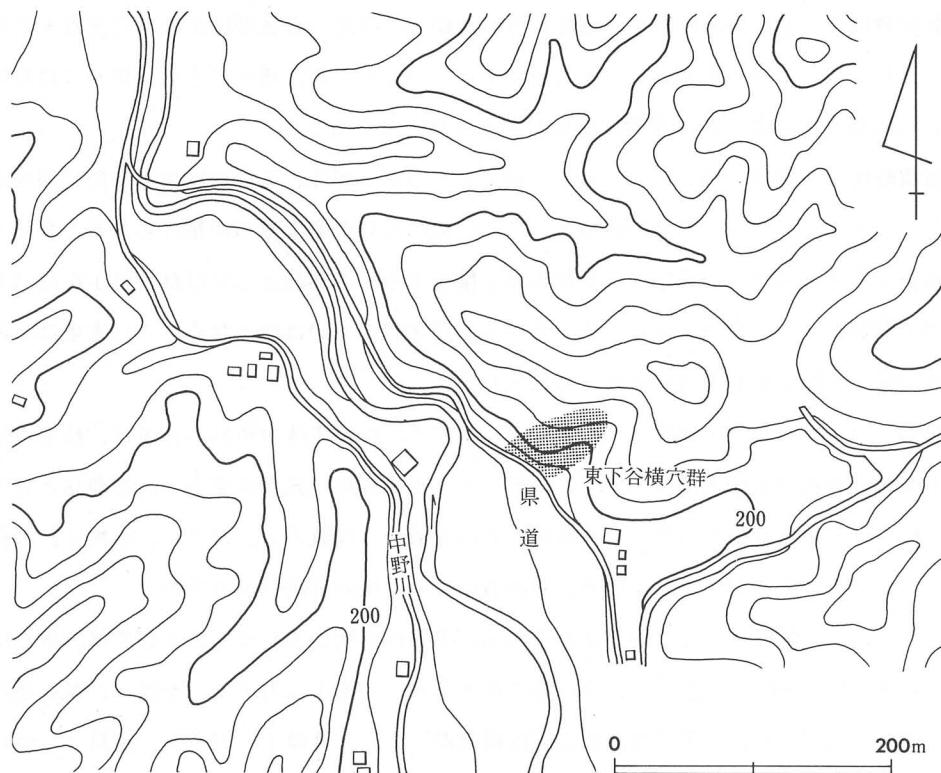
## I 調査に至る経過

東下谷横穴群は、島根県飯石郡三刀屋町大字中野1,755番地に所在し、昭和58年6月27日、県道出雲・仁多線道路改良工事中、重機による山腹の掘削作業によって開口、発見された遺跡である。

旧土地所有者藤原盛芳氏から、連絡を受けた三刀屋町教育委員会は6月28日現地に急行し、既に開口している1～3号穴を確認し、新たに今回発見された1穴（4号穴）の外に未確認の横穴群の所在を予知、直ちに島根県教育委員会文化課と遺跡の確認及び前後策を協議した。一方、同日、三刀屋町役場建設課を通じ工事主体者である島根県木次土木建築事務所、工事施行者入沢建設に対し工事の中止を通知した。

そして約1ヶ月後の7月27日、県教育委員会文化課及び木次土木建築事務所、三刀屋町建設課、三刀屋町教育委員会の四者が現地において横穴群の所在を確認、直ちに島根県木次土木建築事務所長と三刀屋町教育委員会教育長との間に、工事にかかる4～6号穴の発掘調査委託契約を締結し、三刀屋町教育委員会が県教委文化課の協力を得て、発掘調査は同8月2日から9月15日までの約20日間実施した。

（草水）



第1図 東下谷横穴群周辺地形図

## Ⅱ 歴史的環境

東下谷横穴群は、三刀屋の街から南へ8km入った山合の飯石郡三刀屋町大字中野の下谷に所在する。下谷は三刀屋川の支流である中野川が形成する狭い谷合に位置し、周囲の大部分は山林で、段丘上は棚田として利用されている。

本横穴群はこの谷の南に面する山腹の急斜面に穿たれ、現在7穴が確認されている。この横穴以外に、下谷には川を挟んで南側の段丘上に石斧出土地がある。これは、昭和56年実施の圃場整備に伴って発見されたというが、現物は現在せず、出土の詳細は不明である。

周辺地域の遺跡をみると、斐伊川とその支流が形成する河岸段丘上を中心に縄文時代から中世に至るまでのものが多く知られている。

**縄文時代** 三刀屋川流域には槇原遺跡、浜遺跡、宮内遺跡が、飯石川流域には宮田遺跡、粟谷遺跡が存在する。時期は早期から後期と幅が大きいが、発掘が行なわれたのは後期に属する倒立埋甕2個を伴う宮田遺跡のみである。これら遺跡で注目されるのは、大量に発見されている石錘をはじめとする石器で、河川での漁類の採集を窺せる好資料である。

**弥生時代** 前途の浜遺跡、宮内遺跡、宮田遺跡より中期から後期にかけての土器・石器が出土している。発掘調査はほとんど行なわれていないため、遺跡の実態は定かではないが、谷水田を中心とした小規模な稻作が営まれていたであろう。

**古墳時代** 各時代を通じ、この時代の遺跡がもっとも多く、この地域が本格的に開発されたことを示している。前期の古墳としては、街に近い松本1号墳が挙げられる。全長50mの前方後方墳で、内部主体は2個の粘土櫛をもち、副葬品としては獸帶鏡1をはじめ玉類や鉄製品・土器類が多量に出土している。同規模のものは他になく、この古墳はこの地域一帯を支配した有力首長の墓と考えられる。

町内に点在する古墳・横穴は大部分後期に属する。内部主体が知れる古墳は、松本4号墳と斐伊川流域の岩広古墳の二基で、両者とも小規模な横穴式石室をもつ。副葬品としては、松本4号墳より小形の陶硯と土器が、岩広古墳からは直刀2、刀子1、鉄鏃3、馬具(くつわ)1、土器が出土している。被葬者はこの地域の首長であろうか。

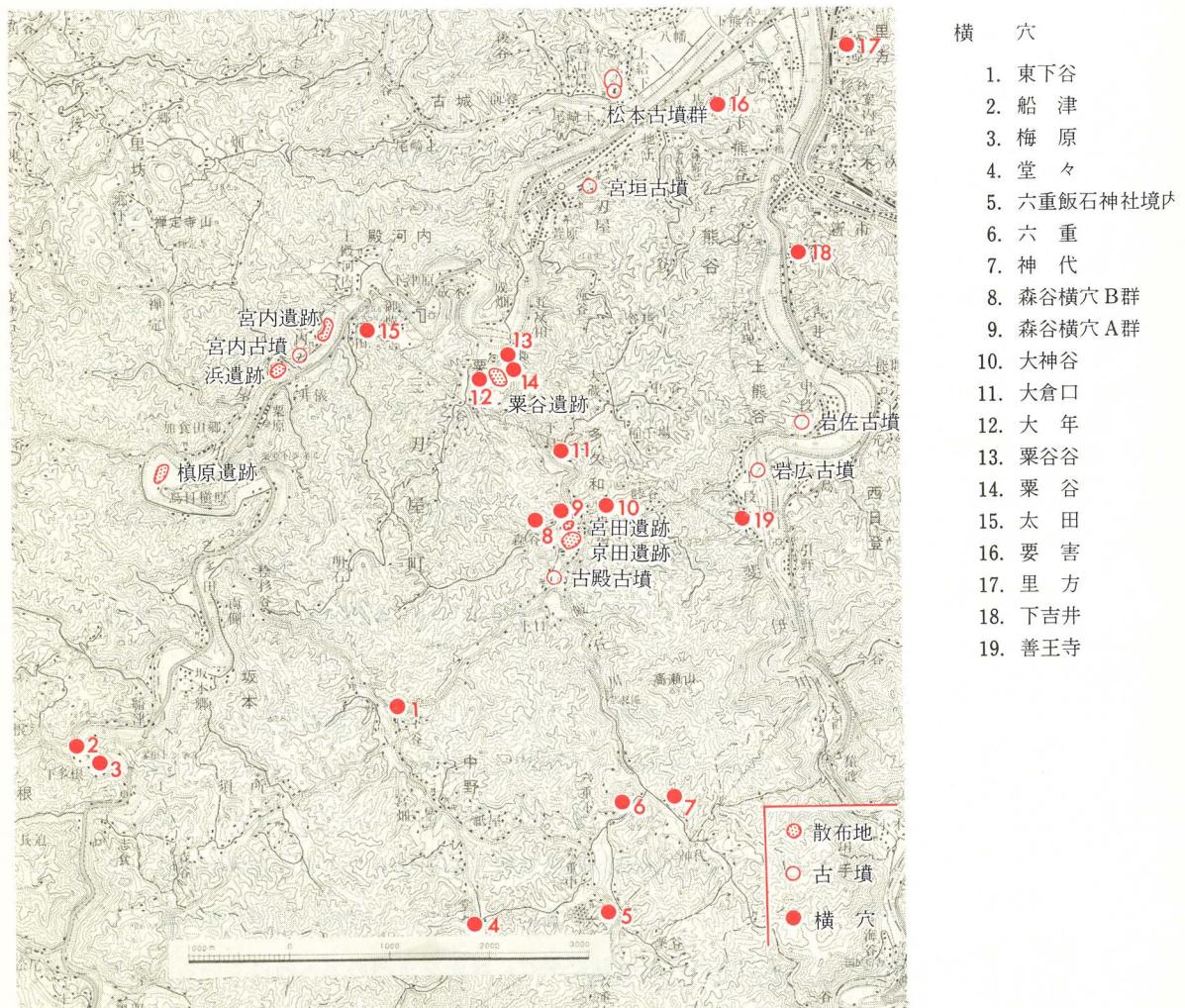
横穴は、三刀屋町内で19群が認められる。実態が判明しているものとしては、飯石川流域の神代横穴-1穴、土器一、森谷横穴群-2穴、勾玉1、刀子1、土器一、粟谷横穴群-4穴-（注2）、三刀屋川流域の太田横穴群-2穴、耳環1、刀子1、馬具(くつわ・がこ)、鉄斧1、土器-（注2）がある。各横穴群は小規模な河岸段丘の縁部にそれぞ

れ位置し、横穴の数や副葬品の量とも等質的である。このことにより、被葬者は各河川段丘を経済基盤とした有力家族の墓と推定される。各横穴の内部形態はほとんど同一で、玄室の平面プランは長方形、断面は三角形を呈し、羨道は妻側に付く。同形態のものは、飯石郡から大原郡、仁多郡に広く分布する。副葬品は僅かな装身具に、少量の武器、そして須恵器がある。これらは、古墳時代後期後半から奈良時代に至る時期のものである。

なお、本横穴群のある中野一帯は、律令時代には出雲国飯石郡飯石郷に属していた。

注 (西尾)

1. 蓬岡法障「三刀屋神代横穴」(『島根県埋蔵文化財調査報告書』第1集、1969)
2. 三刀屋町教育委員会『太田横穴群発掘調査報告書』(1982)



第2図 東下谷横穴群と周辺の主要遺跡

### III 東下谷横穴群の概要

東下谷横穴群は、調査を行ったもの3穴、調査対象外に3穴の合計6穴が確認された。谷の奥から1・2・3号とし、県道脇に開口したものを4号、荒神様の後方より検出したものを5号、丘陵最上部より検出したものを6号とした。各横穴の位置関係は、1号穴を除く他の横穴は各々10数mの間隔を持って位置している。1号穴と6号穴が同様の標高に、それより4.5m下った場所に2号穴、さらに5.5m下った場所に3号穴、5号穴、そこから5m下った所に4号穴が位置している。1号穴・3号穴は、調査前より開口しており玄室内には土砂が流れ込んでいる。2号穴は、現在林道の下に埋まっている。4号穴は、県道とほぼ同一の標高に開口している。県道より下にも丘陵斜面が続いており、現在では確認不可能であるが、横穴が存在した可能性がある。

#### 4号穴

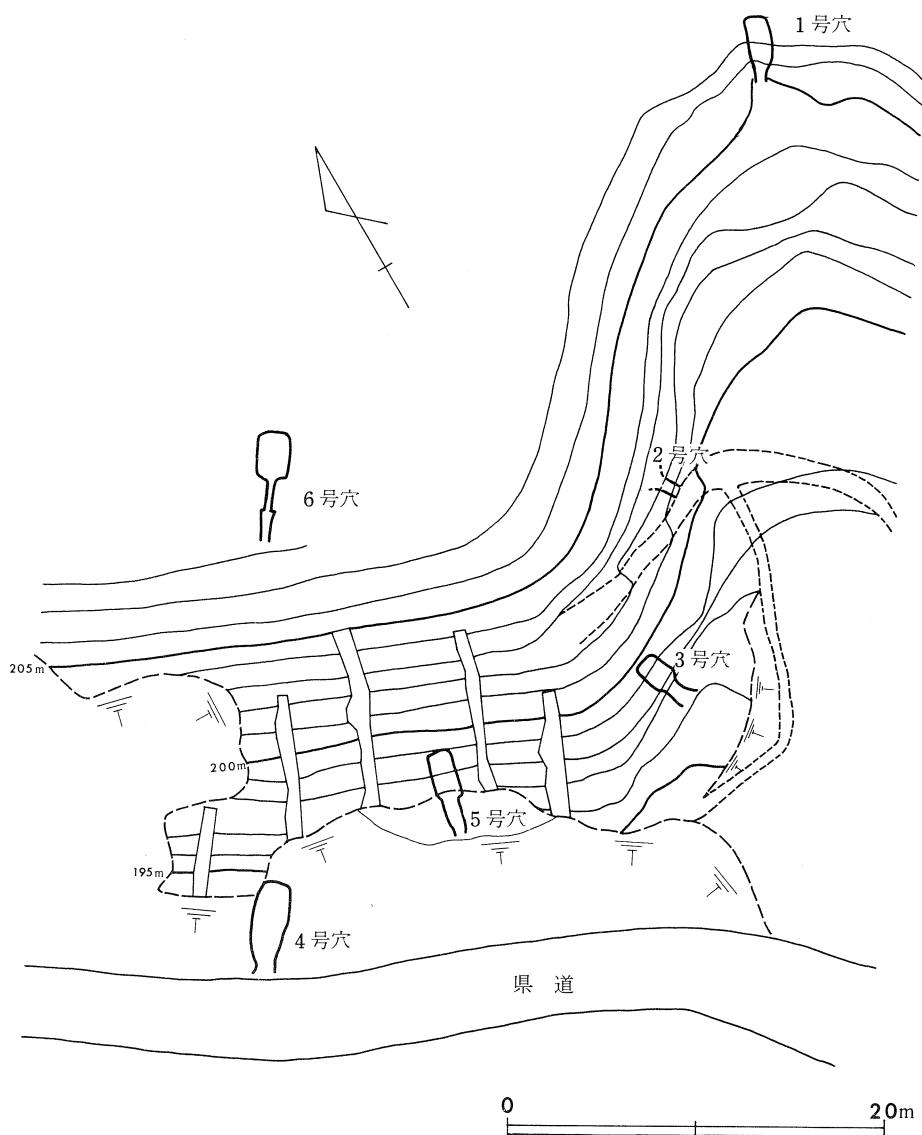
4号穴は、前庭部を県道により削られていたが、県道の拡幅に際し丘陵斜面を削ったところ開口した。遺物は開口後持ち出され、一時的に1号穴の方へ運び込まれていた。羨門上部・側壁・玄門上部・側壁は自然崩壊している。羨道部には高さ5cmの段が削り出されており、閉塞時に蓋等を置くためのものと思われる。羨道は断面方形を呈しており、長さ0.8mである。玄室の平面プランは縦長長方形を呈し、無袖で玄門部で最も細くなり玄室へ向け緩やかに広がっている。天井は断面テント形で床は中央部分がわずかに凹んでいる。奥壁は残りが良く原形を留めており、上部が前方へ0.2mせり出している。縦断面をみると、玄室床面は玄門へ向け傾斜して低くなっている、高低差は0.2cmである。玄室の長さは3.1m、幅は奥壁で1.65m、塞門部で1.8mである。天井部も同様に傾斜しており、玄門付近で弧状をなして一段と低くなっている。天井の高さは、奥壁近くが1.4m、玄門部で1.1mとなっている。

遺物は開口後持ち出されており出土状態は不明である。しかし、発見者の話しにより不正確ながら位置が復元出来た。玄室の南側から中間部分に須恵器の壺が3セット、6個体出土している。壺は、蓋と身がセットとなるが散った状態であった。玄室の北側中央部分より、勾玉1が出土している。また、玄室北側の東壁寄りからは大刀（第5図8）が出土している。鋒先を主軸と平行に玄門の方へ向けて置かれていた。さらに、大刀（第5図9）は、玄室の北側西壁近くでこれも玄室の主軸に平行に鋒先を玄門の方へ向けている。玄室の左側には、長径が約30cmの扁平な河原石が3点出土している。これは、棺台等に使用したものと思われる。

4号穴より出土した遺物は次のようにある。

玄室	須恵器	杯 6
鉄製品		大刀 2
玉		勾玉 1

須恵器杯は3セット出土しておりいずれも小形の杯である。蓋は天部に丸味を持ち、口縁端部近くでやや内傾している。身は器高が低く、受部が外方へ短く突出し、立ち上り



第3図 東下谷横穴群配置図

は内傾し立ち上る。蓋・身を1つのセットとしてとらえたのは、法量、焼成、色調よりである。1・2は、色調が灰色で身の方に自然釉が付着している。3・4は、ともに自然釉が付着し、内面には「×」と「×」のへら記号を持つ。5・6は、色調が青灰色である。  
(1)  
これらは、山陰須恵器編年でIV期にあたるものと思われる。

勾玉（第5図7）は、明縁灰色を呈しており、頭部の両面、腹部は扁平になっている。表面は丁寧な仕上げにより光滑を持っている。穿孔は一方向より穿けられている。長さ3.8cm、幅は頭部で1.0cm、腹部で1.05cm、尻尾で0.55cmである。孔径は0.43cmと0.22cmである。

大刀（第5図8）は、把頭部を欠損するものの刀身部分は鋒先まで残る。現存長は46.3cmである。

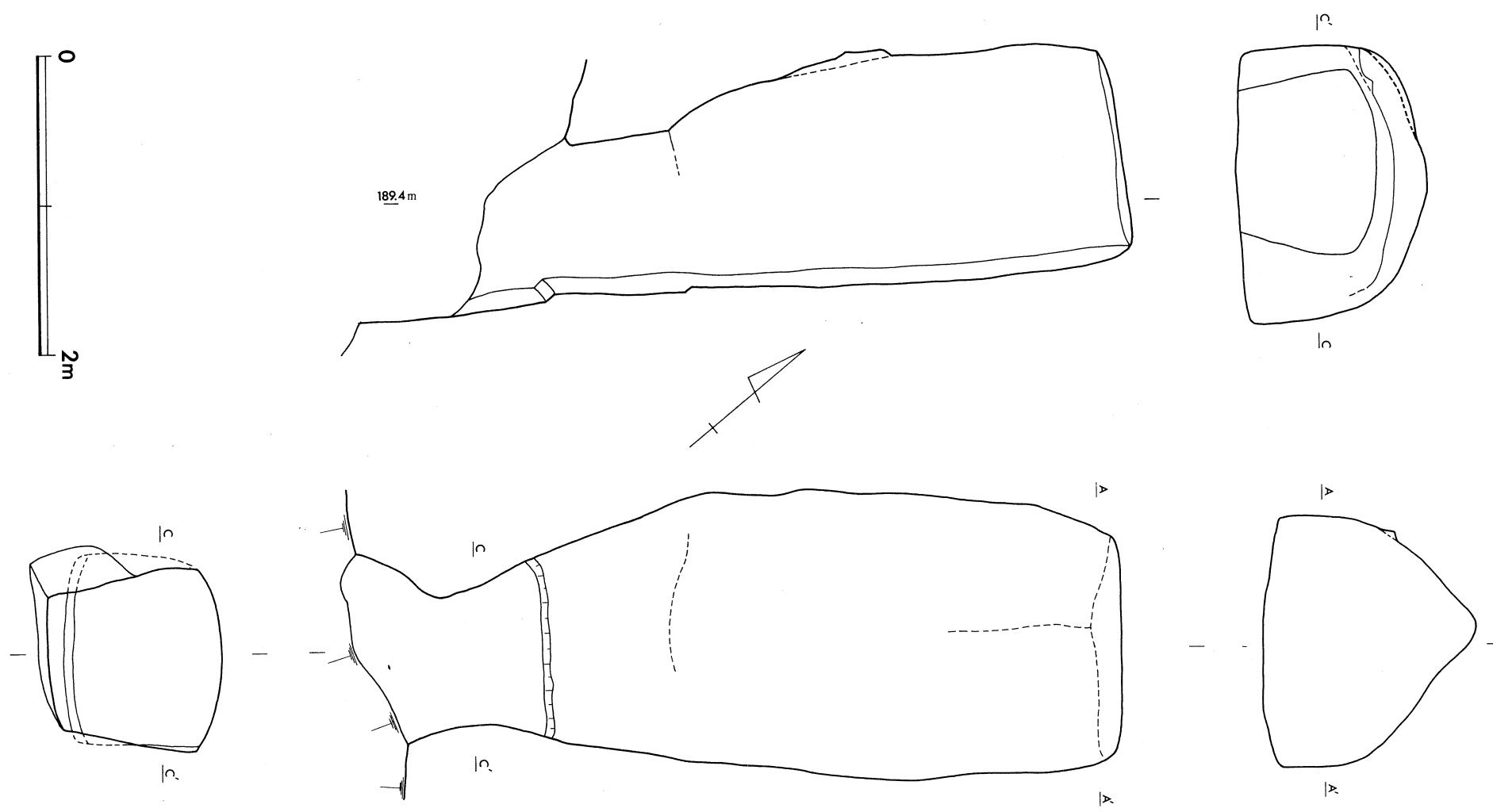
把は扁平な作りとなっており、責金具の近くには細めの糸と、その他には太めの糸を巻きつけている。糸の下には木質は認められないものの、本来は木把であったと思われる。把卷止めには、銅製の責金具を使っている。責金具はやや扁平な倒卵形を呈しており、長径3.2cm、短径2.1cm、幅0.3cmを測る。

鞘部分には足金具が二ヶ所ある。金銅製の足金具で、それぞれの間隔は9.5cmを測る。鞘の中程寄りの金具は一部を欠くが金箔が良く残っている。足金具には、直径0.4cmの環状の穴が穿いており、金具は倒卵形を呈している。足金具と責金具により鉄製の筒状の金具を固定している、鞘に把が入る形になる。刀身には一部鞘の木質が付着している。身幅は3.1cm、厚さ1.4cmである。

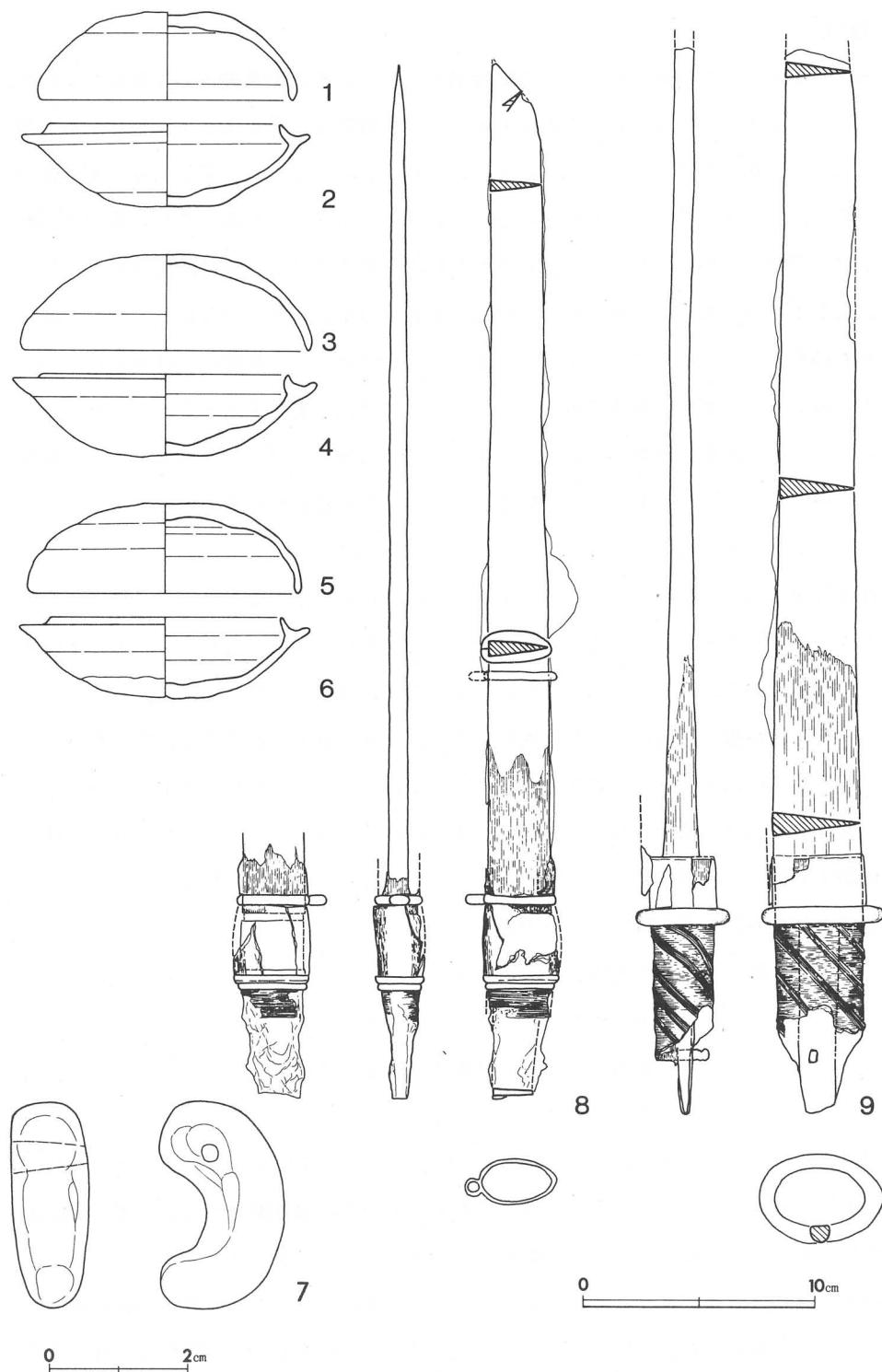
大刀（第5図9）は、把頭部と鋒先と欠いているが把の糸巻は良く残っている。現存長は46.0cmを測る。

把は木製で、不整な方形の目釘が一ヶ所あり把と茎を固定している。目釘の長さ2.3cm厚さ0.6cmである。把の木の上に幅1mmの細い糸を刀身と直角に何重にも巻きつけ、その後に細い糸を3～4本、幅3mmの単位で刀身に対し斜めに巻きつけている。鐔は鉄製で倒卵形を呈しており、長径53cm、短径3.9cm、厚み0.7cmである。把の断面は随円形を呈しており幅を持つものである。

鞘部分の木質が刀身に付着している。鞘には鞘口金具が残っており、鞘口金具の中にはばきが納まるものと思われる。鞘口金具の下にも木質が残っており把木の一部と思われるものでその上にはばきが装着されるものと思われる。関部分は把木の中にあり不明である。刀部の鞘口近くの身幅は38cm、厚さ0.9cmである。



第4図 東下谷4号横穴実測図



第5図 東下谷4号横穴出土遺物実測図

## 5号穴

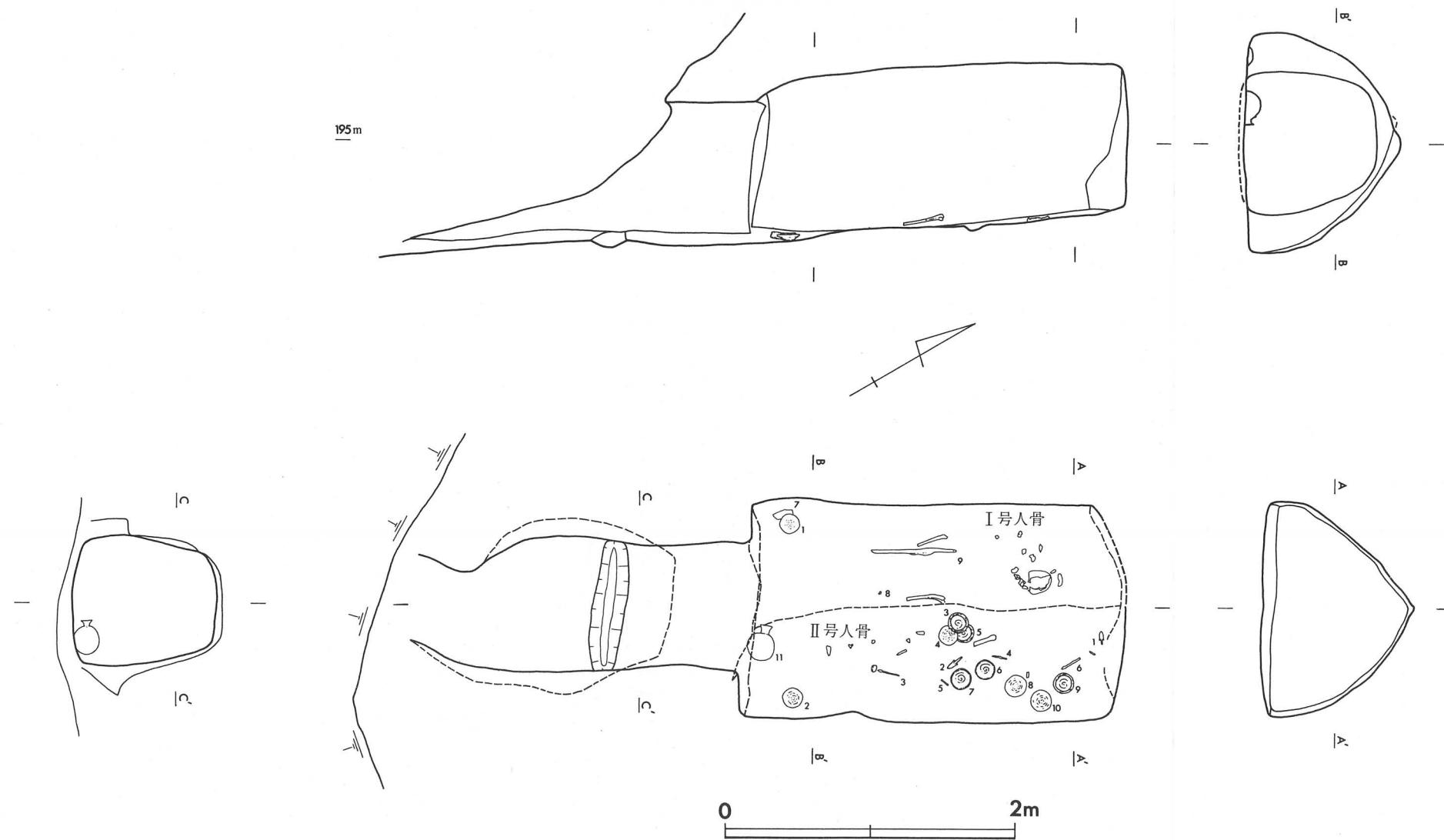
県道より 5 m 登った斜面に杉の大木が 3 本植えてあり、それを荒神として祭られていた。5号穴は、その木の後方より検出したものである。前庭部は、長さ 1.2 m、幅 0.9 m を測り、それより南側は丘陵斜面となっている。羨門には、幅 0.25 m、深さ 0.05 m の溝が掘られており、閉塞の際に木蓋等を受けるためのものとも考えられる。もし、蓋が置かれたとすれば蓋はやや傾斜を持ち立て掛けられていた状態となる。羨道は断面カマボコ形を呈し、長さ 1.0 m、幅 0.95 m を測る。玄室は縦長長方形のプランをなしており、両袖を持ち右袖 0.3 m、左袖 0.25 m を測る。天井は、断面テント形で奥壁はほぼ垂直に立ち上る。玄室長 2.6 m、玄室の幅 1.5 m を測る。天井の高さは、奥壁で 0.95 m、中央部で 1.1 m である。玄室床面の縦断面をみると、奥壁と玄門の比高差は 0.26 m である。横断面をみると中央が弧状にやや低くなっている。玄室内は花崗岩の風化層ということもあり、ノミ等による加工痕は残っていない。

埋葬人骨は 2 体分検出している。玄室奥の左側に頭骨が出土する I 号人骨、玄室の玄門寄りのものを II 号人骨とした。I 号人骨は頭骨が玄室奥に、手前に大腿骨が大刀と平行するように残っていた。しかし、頭骨の付近には足骨・仙骨などの骨があり、白骨化の後に移動した可能性が強い。鑑定によれば性別は男性、年令は成人、血液型は B 型と推定される。当初 5 号穴には 1 体のみの埋葬と考えていたが、玄室の玄門寄りから I 号人骨とは別個体の頭骨の一部分と歯牙が検出され最低 2 体の埋葬があったと考えられた。II 号人骨は骨自体が小形であり、頭骨の厚さも薄いことから年令は小児と推定された。

5 号穴より出土した遺物は次のものである。

前庭	須恵器	甕 1
	須恵器	壺 6 提瓶 1
	鉄器	鉄鏃 5 鏑 1 鉄斧 1 大刀 1
玉		勾玉 1

大刀は、I 号人骨の大腿骨に側って鋒先を玄門方向へ向けている。この大腿骨と平行した所にも大腿骨があり、その先端から勾玉が出土している。須恵器の杯は、玄室の右側より 8 個体が出土している。玄室の玄門寄りの左右両袖から壺の蓋と身がセットで出土し、左袖の身の方には鉄斧が重なって出土している。玄門部の中央からは提瓶が口縁を横にし出土している。玄室の右側に集中した壺と玄門部の壺を比較すると、玄門付近の壺がやや小形で色調は灰色であるのに対し、玄室右側の壺は色調が青灰色を呈している。これらから玄門付近の壺と鉄斧は一群の副葬品としてとらえられると思われ、これらの遺物は第 II



第6図 東下谷5号横穴実測図

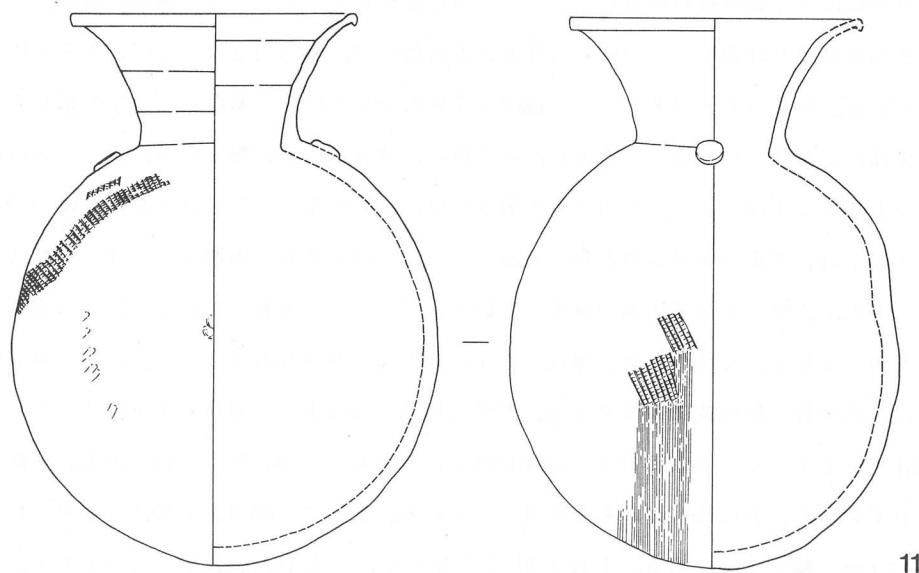
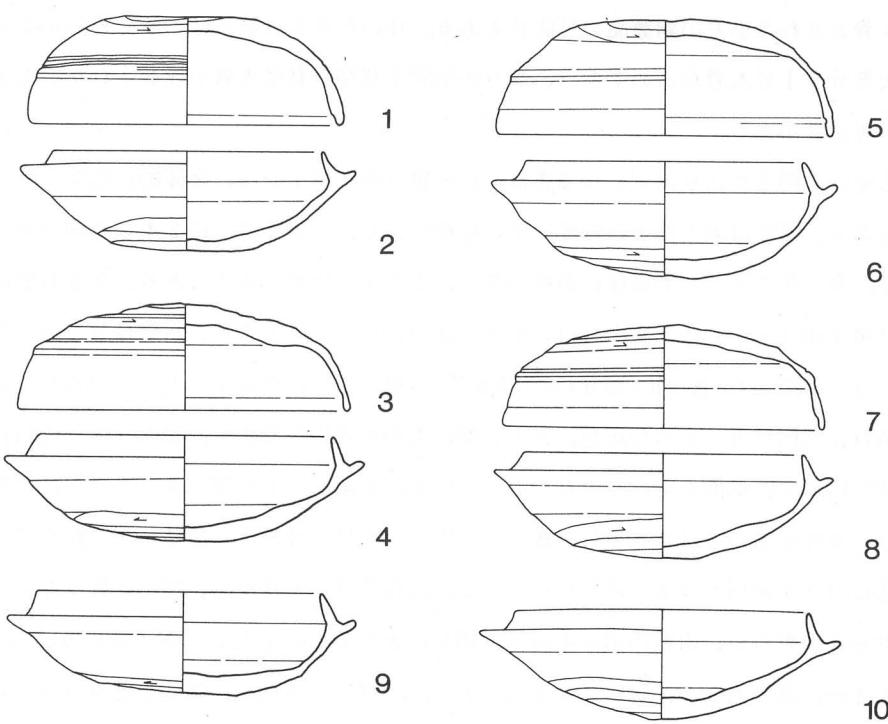
号人骨とされた小児の副葬品の可能性もある。壺の形態より新旧は判断し難いが玄室の奥の大部分をⅠ号人骨が占めており、残りの空間を利用しⅡ号人骨が埋葬されたことより追葬の可能性がある。

玄室の玄門近くより出土した須恵器の壺・蓋（第7図1）は、全体的に器壁が厚く、小形である。器形は天部と口縁部の境に稜線があり、天部寄りに2本の沈線が施されている。身（第7図2）も同様に器壁が厚く、立ち上りは低いものである。玄室右側の壺・蓋（第7図3.5.7）は、玄門付近のものに比べ口径がやや大きく、器壁は薄く作られている。身（第7図4.6.8.9.10）の方もやや大形で、器壁は薄く、立ち上りも高く作られている。色調は、玄門付近のものが灰色、玄室右側のものが青灰色である。提瓶（第7図11）は、体部が円形で両側面ともふくらみをもっている。側面の扁平な方はタタキ目が良く残っており、丸味をもつ方はタタキ目の後で同心円のカキ目の後をナデ調整により仕上げている。肩部には2ヶ所円形浮文を貼り付けている。口縁部はやや外反し、端部を折り返している。

これらの須恵器は、山陰の須恵器編年のIII期にあたるものである。甕（第8図10）は、口径23.4cm、器高51.9cm、胴部径46.8cmである。口縁部は外返し、端部を肥厚させている。胴部は肩が張り、緩やかに底部へ続いている。底部付近は、焼成の際の焼きひずみが大きい。肩部には厚く自然釉が付着しており、色調は黄緑色を呈している。胴部外面は、平行タタキの後をカキ目調整し、口縁部内外面とも回転ナデ、胴部内面は同心円のタタキ目を施している。勾玉（第8図8）は、瑪瑙製で赤茶色を呈している。頭部の一部を欠損しており、全体的に扁平な作りのものである。計測値は、全長3.8cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm、孔径0.45cm～0.1cmである。大刀（第8図9）は、鋒を欠損しており、全長57.9cm、刃部の長さ48.2cm、刃部の中間部分の幅2.8cm、厚さ0.6cmを測る。両闘で茎には目釘が残る。目釘は方形で、幅0.5cmで片側のみ残っている、茎には柄の木質が付着している。鐸は倒卵形を呈しており、長径5.4cm、短径は復元径3.6cm、厚さ0.8cmである。鉄斧（第8図7）は、鍛造製の無肩式で全長9.2cm、刃部の幅3.8cmである。鉄鎌（第8図1～5）は5個体出土している。2は平根式で逆棘が付く、残存長15.2cm、幅3.5cmを測る。茎部分は折れているが、竹に差し込み糸で巻きつけている。3はやや細身の平根式で逆棘が付き全長12.4cm、幅2.7cmである。1は尖根式のもので、全長16.0cm、幅1.5cmである。茎部分は、矢柄装着の本質が一部残り、その上には樹皮を巻きつけている。4は、笠被から茎にかけての破片で残存長7.8cmを測る。5も同様で残存長12.8cmを測る。6は鉈で、全長15.0cm、刃部の幅1.4cmを測り茎が途中で折れている。

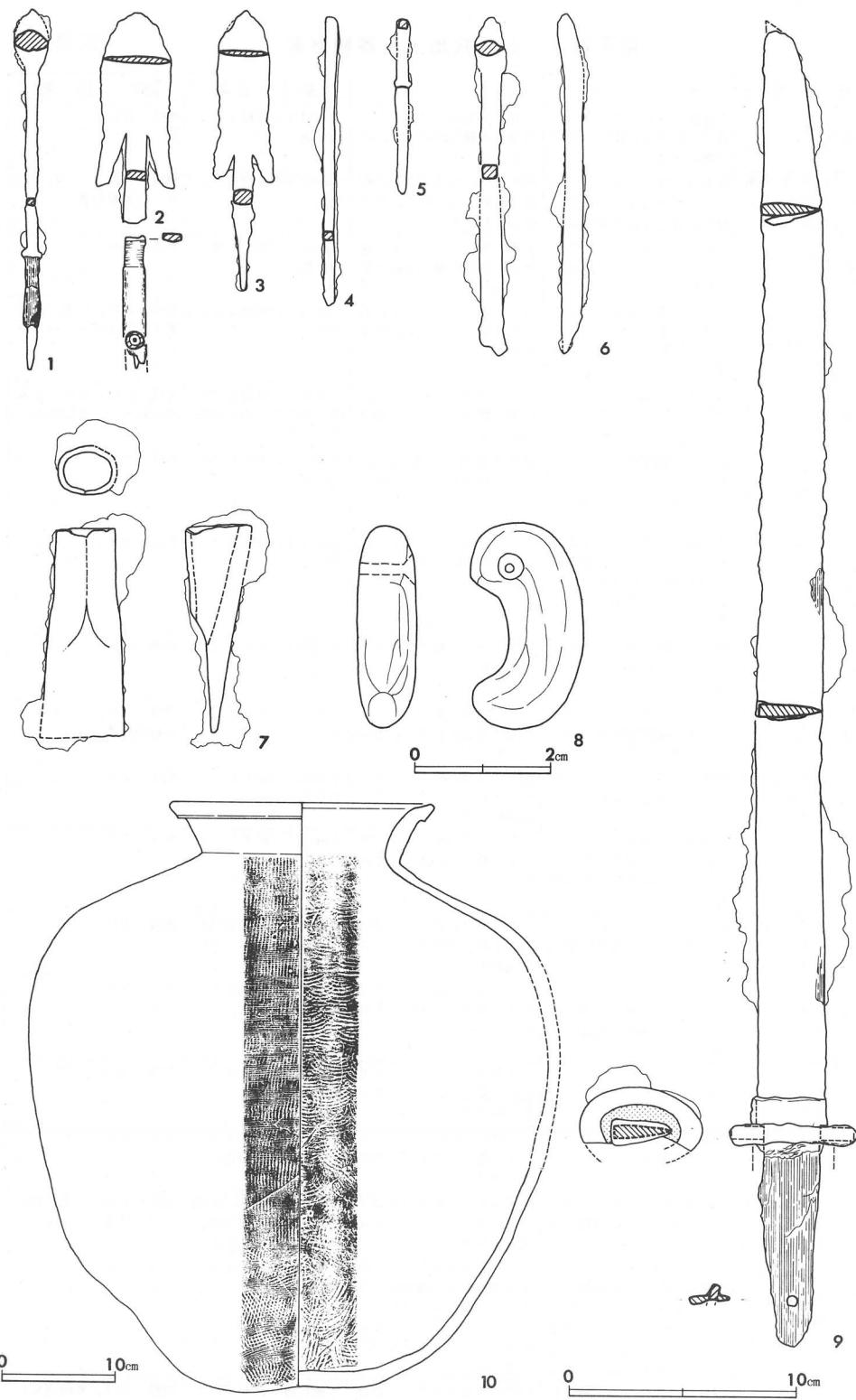
（広江）

注1. 2 山本清 「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』所収、1971年）



0 10 cm

第7図 東下谷5号横穴遺物実測図(1)



第8図 東下谷5号横穴遺物実測図(2)

東下谷4・5号穴出土土器観察表

番号	品種	法量(cm)	形態	手法	胎工・色調	備考
1	蓋	口径 11.0 器高 3.8	天井部は平坦で外下方へゆるやかにのび、端部付近で内側に屈曲	天井部外面はヘラおこし、内面は不整方向のナデ、その他は横ナデ	1mm以下の砂粒を含む暗灰色	焼成 良好
2	坏	口径 10.0 受部径 7.6 器高 3.6	底部は平底でゆるやかに立ち上り受部に至る。受部は短く立ち上りは内傾する。	底部外面はヘラおこし、内面は不整方向のナデ、その他は回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む灰色	焼成 良好 外自然釉付着
3	蓋	口径 12.3 器高 4.1	天井部は丸味を持ち、外下方へゆるやかにのび、端部は鋭い。	底部外面はヘラおこしの後ナデ、内面不整方向のナデ、他は回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む青灰色	焼成 良好
4	坏	口径 10.6 受部径 13.2 器高 3.5	底部は平底でゆるやかに立ち上り受部に至る。受部は短く、立ち上りは短く内傾する。	底部外面はヘラおこし、内面不整方向のナデ、他は回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む明灰色	焼成 良好、外面に自然釉付着番号。内面に×のヘラ記号
5	蓋	口径 11.4 器高 3.9	天井部は丸味を持ち、外下方へゆるやかにのび、端部は丸い。	天井部外面はヘラおこし、内面不整方向のナデ、他は回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む外-暗灰色、内-灰白色	焼成 良好、外面に窯着内面に×のヘラ記号
6	坏	口径 10.0 受部径 12.8 器高 3.6	底部は平底でゆるやかに立ち上り受部に至る。受部は短く、立ち上りは内傾して上る。	底部外面はヘラおこし、内面不整方向のナデ、他は回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む青灰色	焼成 良好
1	蓋	口径 12.4 器高 4.3	天井部から外下方へゆるやかにのび、天井と口縁の境には沈線を入れ稜をつくり出す。口縁は内湾気味に広がる。	天井部外面はヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む青灰色	焼成 良好
2	坏	口径 10.8 受部径 13.6 器高 4.0	底部は平底でゆるやかに立ち上り受部に至る。受部は短い。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む灰色	焼成 良好
3	蓋	口径 13.3 器高 4.3	天井部から外下方へのび、口縁との境に稜を作り出し、口縁は外方へ広がる。	天井外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む青灰色	焼成 良好、内面に黒色の粒子付着
4	坏	口径 11.6 受部径 13.9 器高 4.2	底部からゆるやかに立ち上り受部に至る。受部は短い。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む青灰色	焼成 良好
5	蓋	口径 13.2 器高 4.6	天井部から外下方へゆるやかにのび、口縁との境に稜をなし、口縁端部内面に沈線が入る。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む明灰色	焼成 良好
6	坏	口径 11.8 受部径 14.5 器高 4.2	底部からゆるやかに立ち上り受部に至る。受部は短い。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む外-灰白色、内-青灰色	焼成 良好
7	蓋	口径 12.9 器高 4.1	天井部から外下方へゆるやかにのび、口縁との境に稜をなし、口縁端部内面に沈線が入る。	天井外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm程度の砂粒を多く含む、青灰色	焼成 良好
8	坏	口径 11.1 受部径 13.6 器高 4.2	底部からゆるやかに立ち上り受部に至る。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む暗青灰色	焼成 良好
9	坏	口径 11.4 受部径 14.0 器高 4.1	底部からゆるやかに立ち上り受部に至る。立ち上りは内傾し立ち上る。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の砂粒を多く含む、内-灰白色、外-青灰色	焼成 良好
10	坏	口径 11.6 受部径 14.6 器高 4.4	底部は銛っており、受部に至る、立ち上りは内傾し立ち上る。	底部外面は回転ヘラケズリ、内面不整方向のナデ、その他回転ナデ	1mm以下の細かい砂粒を含む、内-青灰色、外-暗灰色	焼成 良好、内面に黒色の粒子付着
11	提瓶	口径 11.5 器高 21.9 銅部径 15.6 17.0	口縁部は外反し立ち上る。胴部は円形を呈し側面は円形粒土板を貼り付けた方は丸味を持ち、もう一方は平坦となっている。肩部に2個円形の粘土を貼り付ける。	口縁部外面回転ナデ、胴部側面の平坦な面には平行タタキの後、同心円状のカキ目、円形の面はタタキ目の後カキ目を施しナデで行っている。	1mm以下の砂粒を多く含む、暗灰色	焼成 良好
12	甕	口径 23.4 器高 52.0 銅部径	口縁部は短く外方へ開き立ち上り、頭部が折曲し肩にかけてゆるやかに広がる。底部は焼きひずみにより凹凸がある。	口縁内外面ヨコナデ、胴部以下外面平行タタキの後カキ目、内面同心円状のタタキを施す。	1mm程度の砂粒を多く含む、外-暗灰色、内-灰色	焼成 良好、外面肩部に自然釉付着

## 6号穴

### 1) 遺構(第9図・10図)

6号穴はこの横穴群の最上部にあり、尾根端部頂上からわずか6m下がった位置にある。道路改良の法切り面の段工部分で前庭部がカットされ、前庭部の先端、墓道へ続く部分は失われていた。そして、段工部分では前庭部底面上10~20cmが残存しており、前庭部の平面プランは確認された。なお、この部分の工事中、流入していた埋土中から甕形土器とみられる須恵器片が採取されていた。

前庭部は、幅0.45~0.55mで南の斜面下方からわずかに曲って、斜面に対してほぼ直角に羨道へと続いており、羨門から2.20mが残存している。急斜面地形の地山に深く掘り込んだ前庭部は、わずかな勾配で南前方へ下降している。前庭部には排水溝等は認められなかった。両側壁は急角度で立ち上がる。

羨道は長円形に近い断面のもので、長さ1.40m、幅0.45mと狭く、天井部は剥落しているが、高さは0.8m前後である。

羨門部には深さ約0.1mの割り込みがある。天井部が壊われたためか、割り込みは二重となっている。

玄室は、幅が玄門部で1.6m、奥壁で1.7m、奥行き2.6mの長方形プランであり、両袖を持ち、左・右とも同一の長さである。玄室の主軸は、N-52°Eである。玄室の奥壁はほとんど直立し、側壁は約0.2mまでやや開いて立ち上がり、それからゆるいカーブを持って天井上部に至り、明らかな棟線を残す。断面三角形のテント形を呈している。

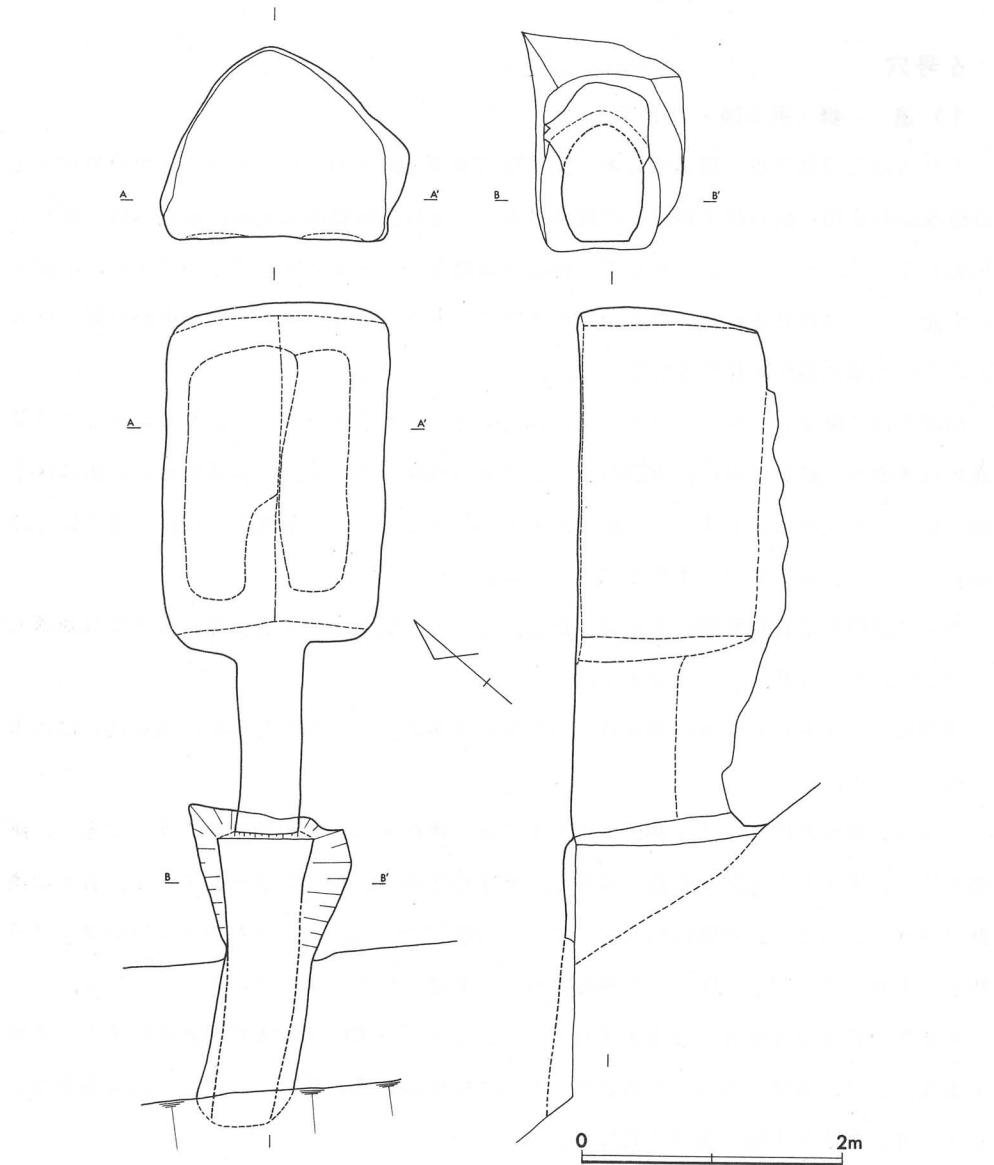
天井部の高さは奥壁近くで1.42mであり、中央部~玄門部は天井の剥落が著しく不明であるが、ほぼ同様の高さであると思われる。壁面は剥落が激しく、残った部分も少ないがノミ等による加工痕は認められない。

玄室床面はわずかに入口方向に傾斜しており、玄室の左(北西)側は高さ約3cm地山を削り出しており、屍床としている。また右(南東)側は真砂土で盛り土をし高まりを作り屍床としている。中央部分は高まりは認められない。

側壁沿いには、奥壁際から浅く不明瞭な溝が掘られている。溝の幅は約0.15m、深さ0.6mである。この周溝の末端は玄門部付近で消滅している。なお右壁部は特に不明瞭である。

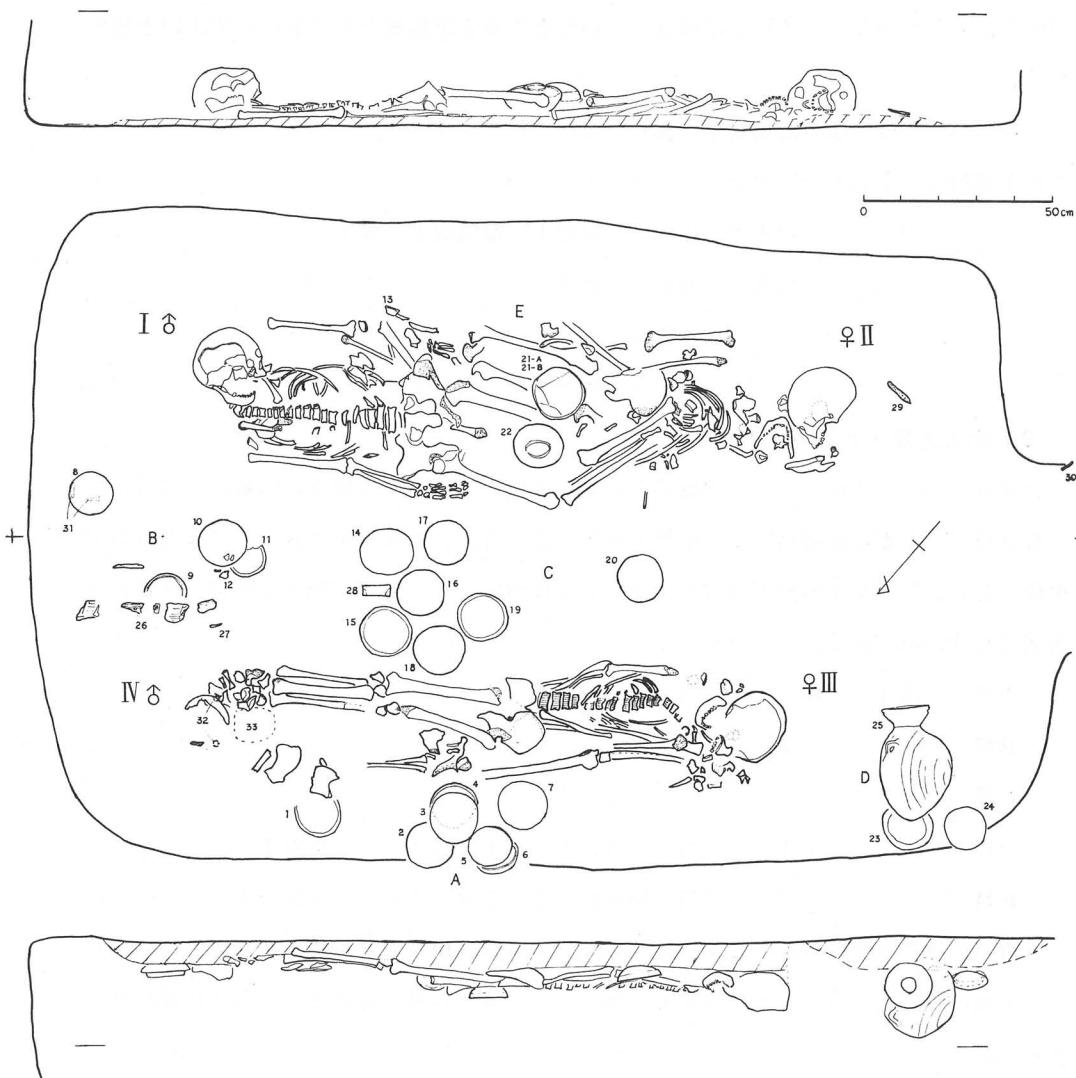
屍床上には人骨があり、保存状態は極めて良かった。左右それぞれ頭位を逆にして2体を重ね合わせた仰臥位で、合計4体が出土している。

人骨は右手奥を頭位とするものI号、その下に重複して頭位を玄門側とするものをII号とし、左手入口側頭位のものをIII号、その下に重複して奥側を頭位とするものをIV号とし



第9図 東下谷6号横穴実測図

た。また、III号とIV号の重複する部分で歯牙が検出されたので、これをV号とした。I～IV号人骨は伸展仰臥位で、そのほとんどが原位置に遺存し、骨の配列の乱れはない。わずかにIII号人骨の右腓骨などが原位置ではなく、その上に重ねたI号遺体の埋葬に際し移動した様子が知られる。I号人骨は整然と配列して保存状態は最も良く、その下のII号人骨は保存状態がやや不良であった。同様にIII号人骨の場合が良く、IV号人骨が最も悪かった。即ち骨格の遺存状態はI号人骨が最も良く、次いでII号人骨、III号人骨で、IV号人骨が不良で埋葬の順序を示している。



第10図 東下谷6号横穴遺物出土状況

鳥取大学医学部井上晃孝助教授によりこれらの人骨は調査鑑定され、I号とIV号人骨は男性、II号とIII号は女性であり、幼児歯牙のみが残っていたV号人は性別不明であった。また、血液型ではII号人骨がA型であり、他はすべてB型である。

IV号人骨に近い位置から、人以外の小骨片3本が採取され、鑑定書では鳥類のものと推定された。

埋葬の重ね合わせ状況や、人骨鑑定の結果から、I号とII号、及びIII号とIV号人骨はそ

れぞれ夫婦の可能性があり、III号人骨には幼児も重ね合わせてあったものとみられるなどから、もし夫婦とその子供が埋葬されていたとすると家族墓としてとらえてよいと思われる。

人骨については別項の鑑定結果によられたい。

出土遺物は以下のものである。

玄室	須恵器	壺 22	提瓶 1	短頸壺 1	甕 1
	鉄器	鉄鏃 4	鋤先 1		
		耳環 2			
		勾玉 3	切子玉 2	管玉 2	

## 2) 出土土器 (第 11 図・12 図)

土器はすべて須恵器であり、前庭部での甕片のほかはすべて玄室内に供献されていた。

玄室内での土器の配置は、左手壁際中央部付近 (A)、奥部中央 (B)、ほぼ玄室の中央部 (C)、玄門左手隅角部 (D)、及び右手に埋葬された I 号人骨の膝位付近 (E) の各部分に分かれている。

A群	蓋 3	壺 4	(内 組み合わせ 1 セット)	
B群	2	2		
C群	4	3		
D群	1	1	(内 組み合わせ 1 セット)	提瓶 1
E群	1	1	(内 組み合わせ 1 セット)	短頸壺 1

A群は、IV号人骨の置かれたレベルより浮いており、III号人骨の置かれた面とほぼ一致し、1組の蓋壺 (5)(6) と壺を重ねたもの (3)(4) 以外は蓋壺とも上向きに置かれてあった。

B群は、ほとんど床面に密着する位置に置かれていた。(8)のみ伏せて置かれ、その下に鉄鏃 (31) があった。他の壺蓋は上向きにしてあり、付近に鉄鏃が 2 本 (26)(34) とクリ材の木片 (26) があった。

C群は A群と同様、III号人骨のレベルではほぼ隣接して置かれ、蓋は少し離れた (20) と (18) とが上向きの他は伏せてあり、壺はすべて上向きであった。またここには鋤先状鉄器 (28) があった。

D群は、蓋壺ともに上向きで提瓶と共に床面に近いレベルに並置されていた。

E群は、人骨上に置かれた特異な例であり、I号人骨の大腿骨下端の位置に短頸壺と並んで蓋壺が正位に組み合わせて置かれていた。

これらの土器について概括すると、蓋は口径がほとんど12.7～13.9cm、高さ3.5～4.6cmで、天井部の約3分の1が左回りで中心へ向う削り仕上げで、やや平坦なものが多い。又、体部との境の稜線は、その上下又は下のみの沈線によって浮き上がらせており、体部はやや外開きながら天井部との区分は明確である。削り部分の他は回転な仕上げで、口唇には平坦面が明確でなく、尖り気味のものもあり、内傾するものもある。また焼き歪みの強いもの、天井が丸くふくらむものもある。

坏では、底部が約2～3分の1程度平らなものと丸くなるものとがあり、後者はC・E群にみられる。底部の削りは荒いものが多く、その他の部分は回転な仕上げである。体部との境は明瞭でなく、ほぼ直線的に外に開く。受け部はやや上反し、面に凹線状をつくるものと、水平にやや短く横に張り出し平坦な面のものとがある。後者はC・E群に多くみられる。立上り部は直線～やや反りながら斜上するもので端部は外方へ尖り気味である。受け部からの高さは8～12mmを計る。なおB群の(9)は、底部に『X』字状のヘラ描き記号がある。

提瓶(D群25)の腹部は強く盛り上がっており、面は円形搔き目を丁寧に消している。しかし、背部はほぼ平らで焼き歪みもあり、同心円の搔き目はそのままである。把手は便化しておらず、正しい耳環状である。器体は大形で、口縁は頸部から直線的に短く開くもので、口径12.0cmを計り、外面が内方へ丸く納まる口唇は、1条の沈線によってつくられる稜によって明瞭に区画されている。

短頸壺(E群22)は肩が強く張る高さの低い小型品で広口で短く直立する頸口が付くもの。肩に凹線が1条と、胴内面にも同様の凹線が1条めぐっている。

また前庭部前端付近から工事中に出土した口縁部破片は小型の甕形土器と思われるもので、端部の強く外反するやや短い口縁と外面は細かい条痕状叩目で、内面円形叩目の肩～胴の部分である。口縁端は鋭く尖り、外面は、巾6mmの平面となって端正であり、口縁部内外面ともに丁寧な仕上げにしてある。器壁は薄手で接合部もよく締めてある。

### 3) 木 片 (PL 18-9)

B群の土器の左手側に列をなすように腐朽した木材片が検出された。原形をとどめる部分の破片もなく、どのような製品であったのか不明であるが、板状ではなく、棒状に近いものようであることから木棺等の材ではない。隣接するC群土器と並んで鋤状鉄器が検出されたことから、或は、この木製柄ではなかろうか。因みにこの材の樹種は「クリ」であった。

#### 4) 鉄 器 (第 13 図)

B群土器の蓋（8）によって覆われた鉄鎌 1 本（31）とその近くの 1 本（27）の 2 本は完形であり、先端部と茎端部を欠く鉄鎌 1 本（29）が、II号人骨の頭位付近の土砂の中から、そして羨門部右側の土砂中から刃部を欠くもう 1 本（30）の鉄鎌が検出された。

また、C群土器の間に挟まれるようにして、鋤先状鉄器（28）が供献されていた。鉄器は、都合鉄鎌 4、鋤先状鉄器 1 である。

鉄鎌（27・31）は尖根式鎌で、ともに全長 1 3.6 cm を測る。

（27）は先端から 1.3 cm、幅 1.1 cm の三角形両造り刃部で闊を有し、断面長方形の茎部が 7.2 cm、ほぼ正方形断面の箆被部は 4.8 cm である。箆被部は植物質纖維が付着しており、茎部にはピッチ状の付着物が認められる。

（31）は幅 0.9 cm の闊のない様式で、茎以下の断面は正方形、箆被部は 3.4 cm を測る。茎部には同様にピッチ状の付着物が認められる。

（29）は刃部及び箆被部が欠落している。（30）は箆被部のみ残存した。それぞれ尖根式鉄鎌である。

鋤先状鉄器（28）は、C群土器に挟まれた位置から出土したものであり、刃部幅 7.6 cm 高さ 2.6 cm を測る。厚さ 1.5 ~ 2.0 mm の板状鉄の両端を折り曲げて袋状としたものである。刃は明瞭ではないが、背部から切刃に造られているようである。また、袋部には装着していた木柄の痕跡が残る。

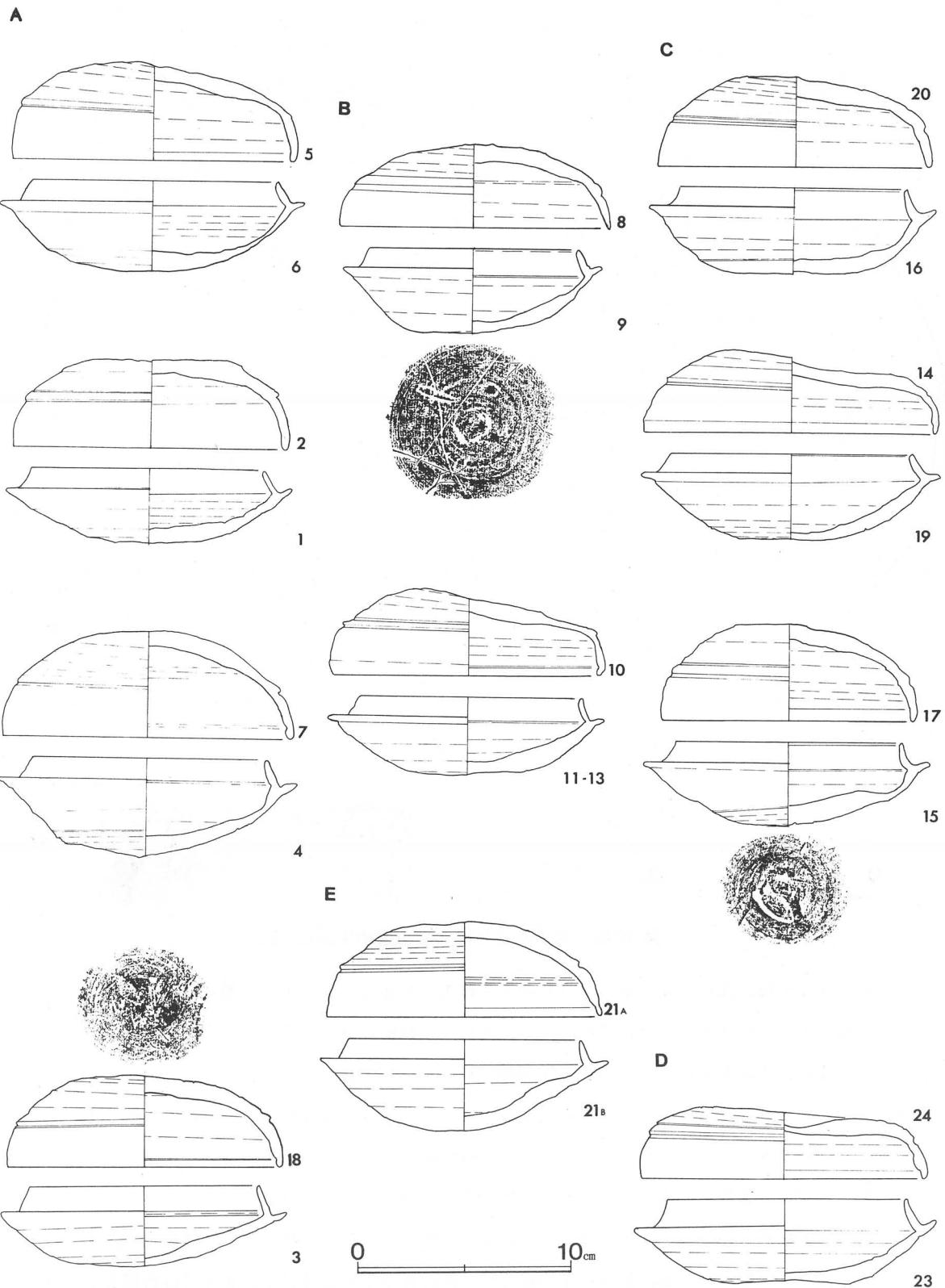
#### 5) 玉 類 (第 13 図)

勾玉 3、管玉 2、切子玉 2 が IV 号人骨胸部から集中出土し、耳環は IV 号人頭骨の左右から各 1 づつ検出した。

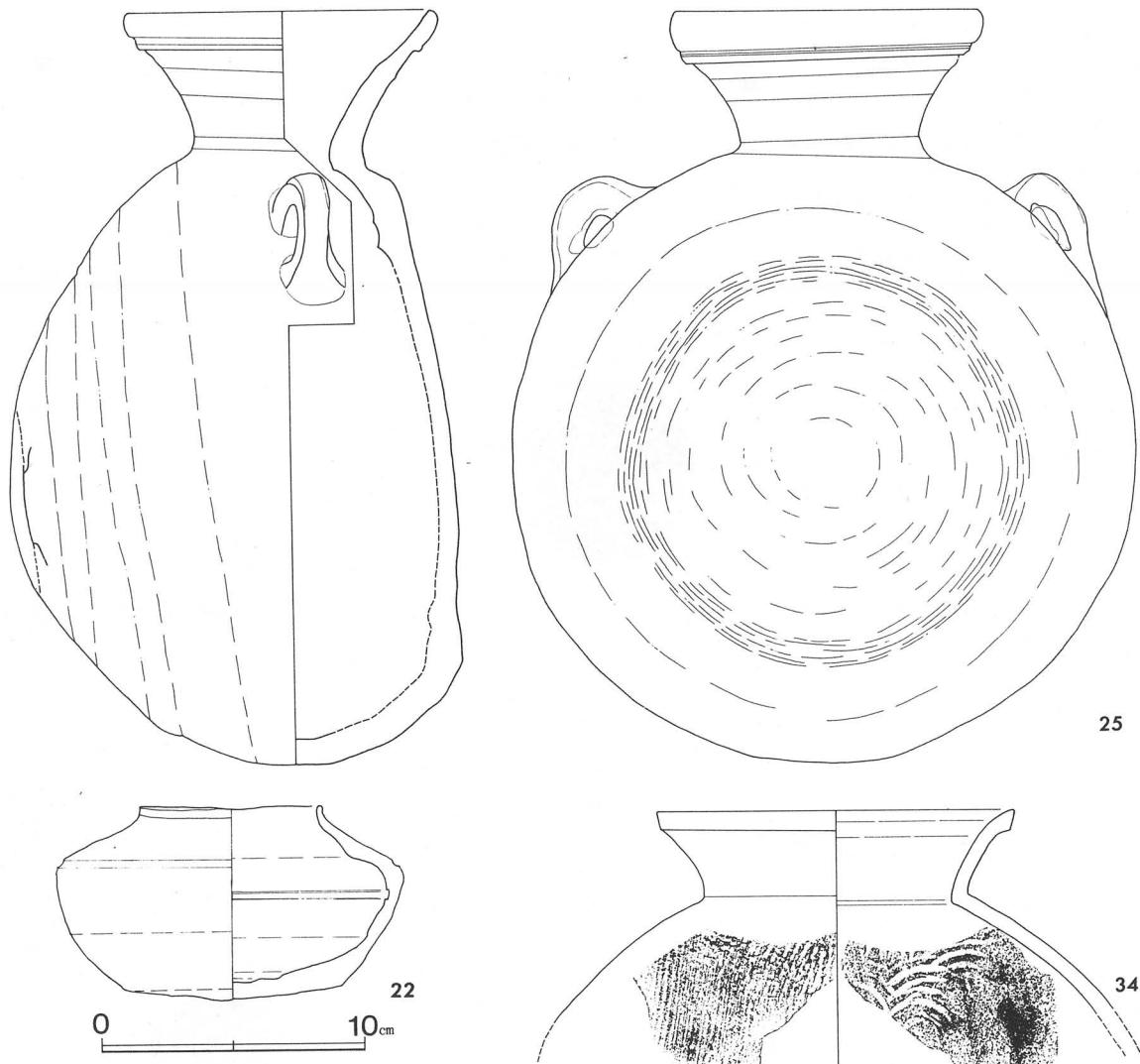
耳環は、頭蓋骨の左右端 1 1 cm の間隔で検出し、被葬者である IV 号人（男）の身に装着したままであったことを示していた。直径 8 mm 断面正方形の銅製で、表面全面が鋳化していた。鍍金の状況は不明。内径 1.4 cm、外径 2.5 cm、隙間は 1.0 ~ 1.5 cm である。

切子玉 2 顆は水晶製である。（33-A）は、長さ 1.8 cm、直径 1.5 cm、孔径入口 3.5 5 mm、出口 2.1 5 mm で受け孔は無い。磨痕が残る程度の並製である。（33-B）は、長さ 2.1 cm、直径 1.6 cm、孔径入口 3.7 5 mm、出口最小部 1.1 0 mm で受け孔が 1 mm 有る。磨きは特に入念で良品である。

管玉 2 顆は碧玉製で、（33-C）は長さ 2.6 0 cm、直径 9.5 0 mm で両端がやや窄む作である。穿孔径は入口で 3.6 0 mm、出口で 1.3 5 mm で受け孔はない。材質がやや不良でわずかに斑点がある。（33-D）は長さ 2.7 5 cm、直径 9.0 0 mm でほとんど円柱状であり、穿孔径は



第 11 図 東下谷 6 号横穴出土遺物実測図(1)



第12図 東下谷6号横穴出土遺物実測図(2)

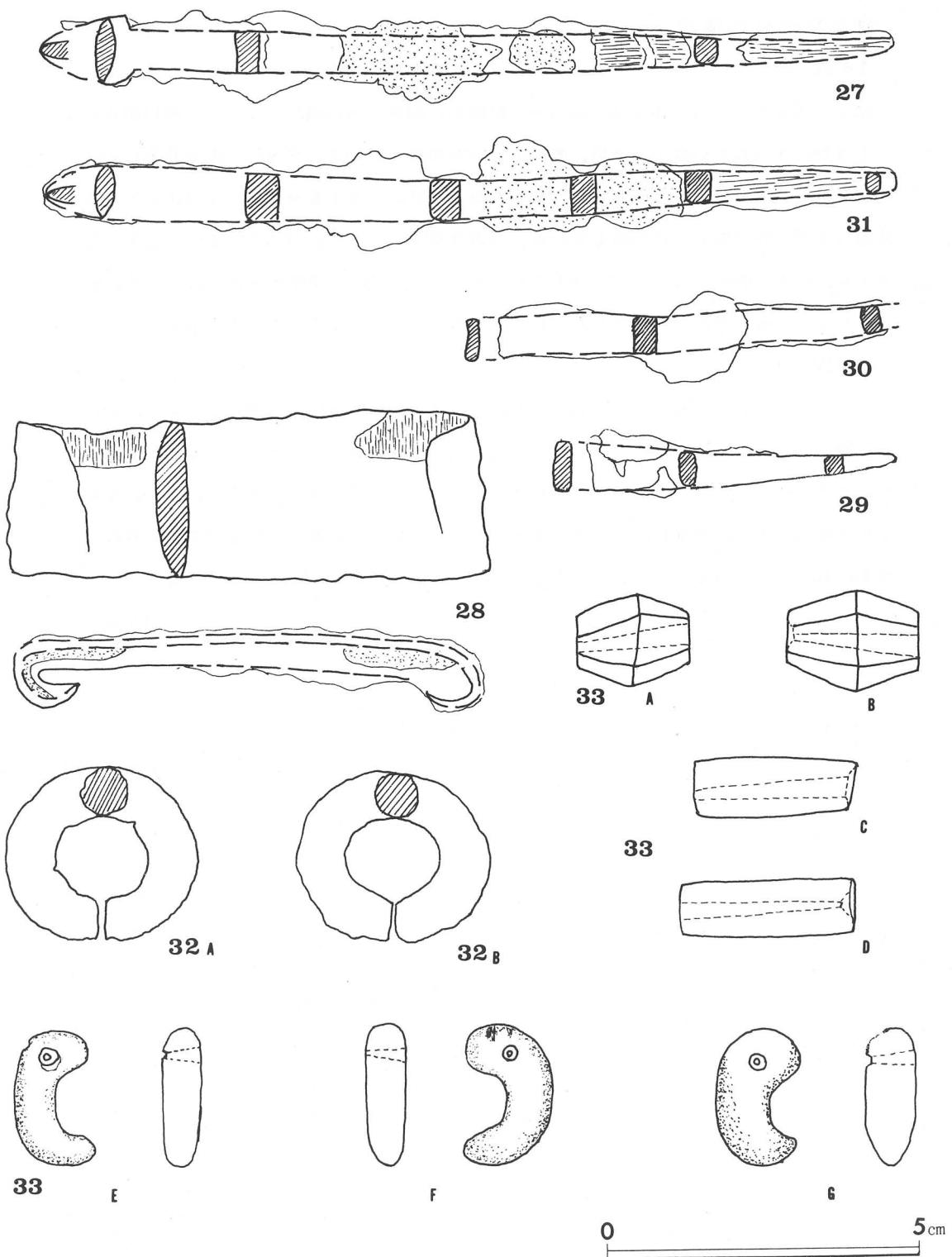
入口 3.20 mm、出口 1.30 mmで受け孔の深さは 1.50 mmである。美しい濃青緑色の材質で良品である。いずれも表面の研磨は良く、肉眼では磨痕は見当らない。

勾玉は、水晶製 1珠 (33-G)、瑪瑙製 2珠 (33-E・F) である。

(33-E) は長さ 2.20 cm、厚さ 0.65 cmの小形で、やや細身造り。穿孔は入口 2.25 mm、出口 0.85 mm、受け孔は認められない。研磨痕はほとんどなくよく磨いた丁寧な造りで、わずかに黄橙色の繩目があるが、全体に淡い色調の佳品である。

(33-G) は長さ 2.25 cm、厚さ 0.85 cmの小形で、太身で端部は尖り気味の造りである。穿孔は入口 2.60 mm、出口 1.15 mmで受け孔は深さ 1.0 mmである。表面には研磨痕が多く残り磨きはややラフである。

(杉原)



第13図 東下谷6号穴出土遺物実測図(3)

## 調査区域外の横穴

### 1号穴

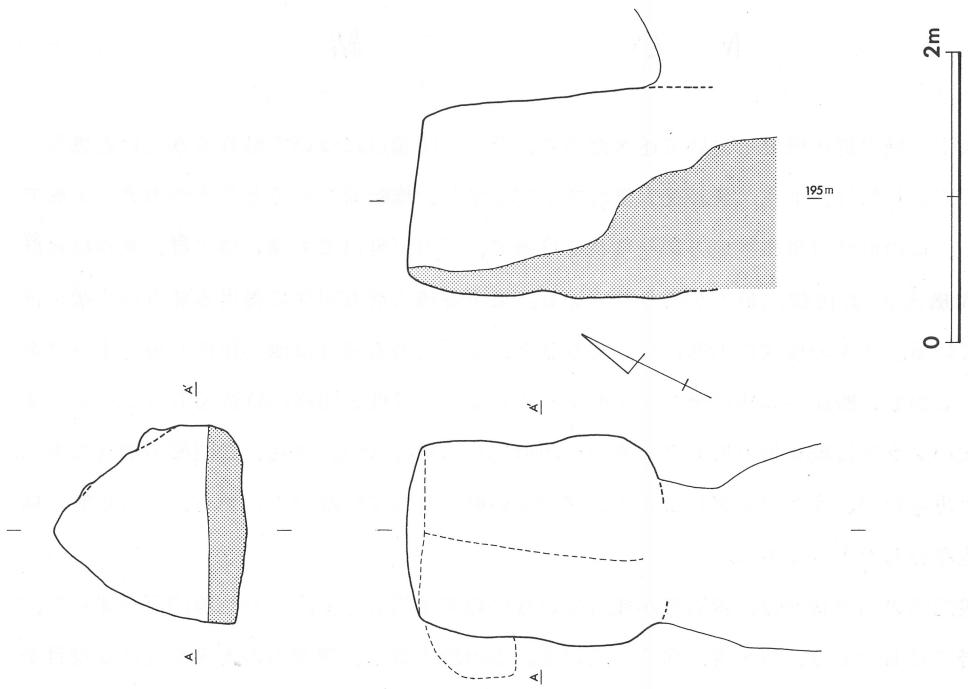
丘陵谷部を県道から 50 m 登った場所に位置し、南東方向に開口している。開口が古く出土遺物は知られていない。玄門、奥壁の一部が崩落している。玄室は、縦長長方形のプランを呈しており、天井は断面テント形である。奥壁は、0.16 m 前方へせり出している。床面は玄門へ向け緩やかに傾斜している。羨道は崩落のため形状は不明である。玄室長 2.85 m、高さは奥壁で 1.2 m、玄門部で 0.8 m である。西側の側壁の下部には 2ヶ所、幅 0.2 m と 0.3 m の方形の穴が穿たれている。これらは後世穿たれたものと思われる。

### 3号穴

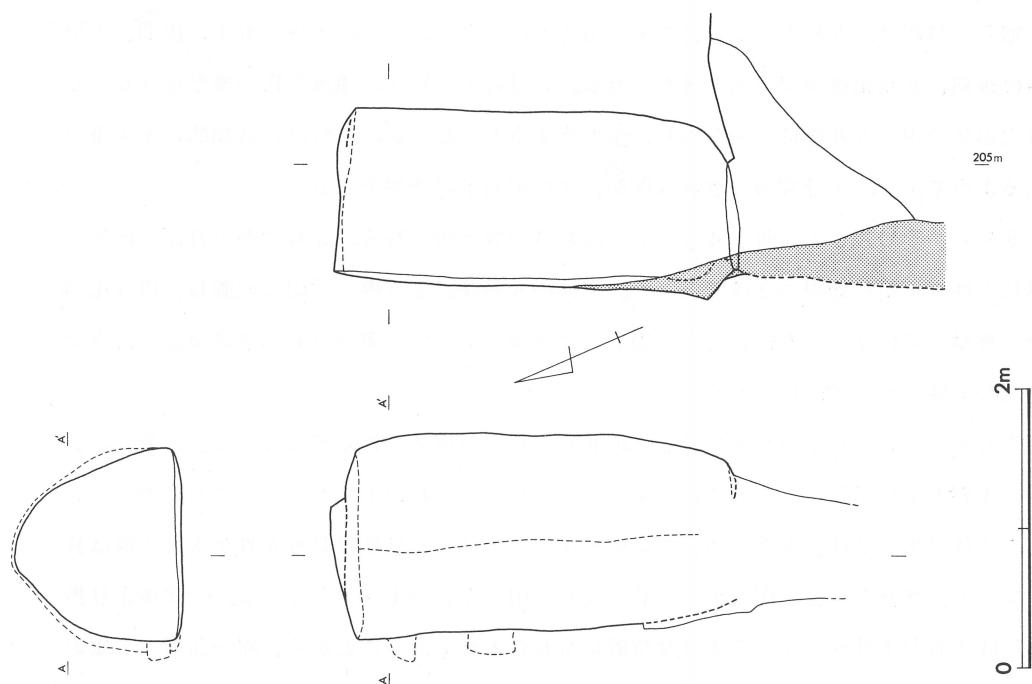
5号穴と同一レベルで 15 m の間隔があいて位置し、ほぼ南向きに開口している。以前より開口しており玄門部は崩落し不明、玄室内にも土砂が多く流れ込んでいる。縦長長方形のプランを呈しており、天井は断面テント形を呈している。玄室は長さが短かく、やや小形の横穴である。奥壁は前方へ約 0.1 cm せり出している。床面はほぼ水平で、天井は玄門部の方が 0.1 m 高くなっている。玄室長 1.75 m、高さ奥壁で 1.35 m である。

(広江)

第15図 東下谷3号横穴実測図



第14図 東下谷第1号横穴実測図



## IV 小 結

東下谷横穴群の概要について述べたので、若干の問題点について触れてみたいと思う。

横穴の形態は、玄室が縦長長方形のプランを呈し、横断面をみると三角形のテント形である。この形態は奥出雲地方にみられる特徴で、三刀屋町内でも森谷横穴群<sup>(1)</sup>、栗谷横穴群<sup>(2)</sup>、神代横穴<sup>(3)</sup>、太田横穴群<sup>(4)</sup>等が知られている。東下谷横穴群も同様に奥出雲地方の特徴を備えている。個々の横穴の形態についてみると、2号穴の玄室長は他と比較し短いようである。しかし、断面が同様にテント形を呈している点では他と同様の特徴をもっている。4号穴のプランは縦長長方形ではあるが、羨道部への袖はない。当初、玄門部が壊れたものかと思ったが、床面の観察によると、玄門部の壁は崩れていないことから、この形態の横穴<sup>(6)</sup>も存在したようである。

羨門部の閉塞状況は、蓋石等が残っていないので不明である。しかし羨門部が4号穴、5号穴においては、段・溝が作られている。この段・溝は、閉塞用の蓋等を受ける役目を果たすと思われる。6号穴の羨門部には削り込みがあり、同様に木蓋等を受けるものと思われる。

4号穴の玄室には扁平な河原石が置かれており、太田横穴1号穴においても同様の河原石が出土しており、棺台等に使用したものと推定されている。

横穴の時期は、5号穴、6号穴出土の須恵器によると、山陰の須恵器編年のIII期、古墳時代後期、6世紀後半であると考えられる。5号穴と6号穴の須恵器坏の器形をみると6号穴の坏の中に天井部に丸味をもち、小形化するものがある。これは、時期的に多少差があるようである。4号穴の須恵器はIV期、7世紀前半の時期である。

5号穴、6号穴とも人骨が残っており埋葬者の数が知られる。5号穴の人骨は、壮年の男性と性別不明の幼児の2体であった。男性の人骨は、玄室内の左側に位置し、白骨化の後に移動している。土器は両者ともIII期の須恵器をもつが、多少時間的経過があるようで小児が追葬された可能性がある。

6号穴は人骨の残りが非常に良く、埋葬時の状況が極めて良く残っている。人骨は、玄室の主軸と平行に置かれており、玄室が狭いためそれぞれの下肢を交差し重ね合わせている。4体は男性2体、女性2体、外に小児歯牙であり、血液型はII号人骨がA型で他はB型である。埋葬順序は、IV(男)→II(女)→III(女)→I(男)である。一穴中より男女の成人骨が下肢を交差するような位置に重ね合わせてあることから、同一血族の2組の夫婦と判定された。また、III号人骨には幼児の歯牙も含まれていたことにより、夫婦、子

供とみられた。これらの人骨に混じって鳥の骨も出土している。これは、埋葬時に特別な意味をもって供献されたものと思われる。5体の人骨の中でもIV号人骨（最初の被葬者）は、鉄器、玉類を持った男性で、際立って他と異なる感じを抱かせる。このように、横穴の被葬者の構成員が知られ、埋葬状況が良く残っていることは注目される。

出土遺物の中でも、4号穴出土の大刀は2本とも外装を良く残している。大刀（第5図8）は、小形で扁平な作りの大刀で金銅製の足金具が残っている。県内において足金具を装える大刀は、安来市鳥木横穴<sup>(10)</sup>の圭頭大刀、同鷺の湯病院址横穴<sup>(11)</sup>の環頭大刀、大田市山王横穴<sup>(12)</sup>の頭槌大刀等がある。大刀（第5図9）は、柄部分に糸巻きの外装が良く残っている。柄木の上に細い糸を巻き、その上に帯状の糸を斜めに巻いている。県内出土の大刀の中でこれだけ保存状況の良いものは例が少ない。

東下谷横穴群の立地は、中野川が形成する河岸段丘が狭くなる南向きの丘陵斜面である。標高200mを測る高所に位置し、横穴からは水田面が見下ろせ、谷の奥まで見渡せる場所である。<sup>(13)</sup>『中野村誌』によると付近から石器が表採されており、この水田で農耕が古くより営まれていたようである。この横穴の被葬者は、段丘上の水田を営んでいたと考えられ、今後このような山間部の谷においても同様に横穴が検出されることと思われる。

（広江・杉原）

注1 三刀屋町教育委員会『太田横穴群発掘調査報告書』、(1982年)

2 注1と同じ

3 蓮岡法璋「三刀屋神代横穴」（『島根県埋蔵文化財調査報告書』第1集、1969年）

4 注1と同じ

5 門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」（『古化談叢』第7集、九州古文化研究会、1980年）

6 粟谷横穴群3号穴も同様の形態である。

7 邑智郡瑞穂町の江迫横穴群で確認されている。

8 山本清「山陰の須恵器」（『山陰古墳文化の研究』所収、1971年）

9 注8と同じ

10 山本清「西山陰の横穴について」

11 注10と同じ

12 注10と同じ

13 『中野村誌』、(1934年)

## 付 編

### 東下谷横穴群出土の人骨について

鳥取大学医学部法医学教室

助教授 井 上 晃 孝

## 5号穴出土人骨

### 1. はじめに

東下谷横穴群は島根県飯石郡三刀屋町中野に位置する古墳時代後期のもので、ここから人骨2体と土器、鉄刀らが出土した。玄室入口から正面正中より左側に1体（第Ⅰ号人骨と仮称）、右側に1体（第Ⅱ号人骨と仮称）が検出された。これらの人骨は骨格順に配列せず、完形の骨ではなく、破片化した骨が、上・下・左・右の一定の方向性もなく散在している。骨は黄褐色を呈し、極めてもろく指圧して容易に壊われる位脆い。これらの人骨について性別・年令・血液型その他について報告する。

### 2. 1号人骨

玄室入口から左側の奥に頭骨を中心に破損した骨片が約11個散在している。玄室入口に近い方に左右の大腿骨があり、その間に長さ120cmの大刀がある。

#### 1) 残存骨

①頭骨：大きく破損、消失しており、残存部位は

- a) 前頭部（両眼窩上縁、眉弓、眉間、オルトメカビ）～左側頭部にかけての部位
- b) 右眼窓下縁～頬骨部の部位
- c) 右側頭部（乳様突起、耳窓、下顎関節窓部を含む）～後頭部にかけての部位
- d) 左側頭部（冠状縫合の側頭部）～頭頂部にかけての部位
- e) 上顎骨部

付着歯牙6個、遊離歯牙4個

口蓋幅36mm、口蓋長45.1mm

切歯縫合

代側部：完全癒着

正中部：癒着なし

横口蓋縫合：癒着なし

口蓋正中縫合：癒着なし

### f ) 下顎骨

正中～右臼歯後三角までの歯槽部が残存しており、歯牙 6 個が釘植している。

遊離歯牙 6 個残存している（第 1 表）。

下顎底 下顎枝はない。

### ②椎骨

頸椎骨 1 個、腰椎骨 1 個、仙骨の一部、部位不明のもの 2 個

### ③胸部

消失

### ④上肢骨

肩甲骨の一部

### ⑤下肢骨

左右の大腿骨体のみで、近位、遠位部は消失

膝蓋骨は左右不明のもの 1 個

足骨は左右の距骨と部位不明の骨 1 個

## 2 ) 血液型検査

資料として、1 号人骨の遊離歯牙、右上顎第 3 大臼歯（8）を用い、紛末化し、脱脂処理後、固定して検査に供した。検査法は抗体解離試験法で行った。結果は第 2 表に示すように、未処理血球、酵素処理血球の両法で B 型と判定された。

## 3 ) 考 察

残存骨は極めて少ないが、残存骨中に重複した骨がみられないことから、1 体が埋葬されたものと推定される。骨の配置をみると、極めて不自然で頭骨の周辺に下部骨である仙骨（骨盤）、膝蓋骨、足骨の距骨らが散在しているので、後臼骨化した段階で移動されたものである。

性別：

顔面の眉弓、眉間の隆起、オルトメトピカの発達はあまり強くないが、右側頭骨の乳様突起は極めて大きく発達しているので男性らしいと推定する。

年令：

頭蓋冠は破損、消失しているが冠状縫合部は欠損、矢状縫合部は一部しかなく不明（しかし、縫合部の切れ込みはかなり複雑で深い）。人字縫合は癒着しているが、正中部は未だ癒着を認めない。

歯牙の萌出：

残存歯牙の中に第3大臼歯が3個残存しているので一応成人域である（第3大臼歯の萌出時期は17才～25才）

#### 歯牙の咬耗

残存歯牙の上、下の小、大臼歯は咬頭の磨耗が著しく平坦化しており象牙質が一部露呈しているので、Martinの分類では1～2度で老年が推定される。

#### 身長：

完形の4肢骨が全くないので身長は不明であるが、残存骨の大きさからは比較的低い男性が推定される。

#### 血液型：

未処理血球法ではかろうじてB型の疑い、鋭敏な酵素処理血球法でB型と判定されB型に間違いないと思われる。

### 3. 2号人骨

玄室入口正面から右側に向って須恵器の壺が2個あり、中央部から奥にかけて壺が8個散在し、その間に人骨が散在している。

#### 1) 残存骨

残存骨は完形のものは1つもなく、破損した小骨片が少数散在する。

①頭骨：部位を特定しがたい頭骨片少數、頭骨の厚さは極めてうすく1～1.5mm程度である。

②歯牙：歯牙は歯冠部のみ4個残存、内訳は大臼歯2個（右上顎の第1、第2大臼歯）小臼歯2個（歯冠部が破損して部位不明）

③椎骨：椎骨体の一部と推定されるもの4個

④胸部：肋骨片の一部

⑤上肢骨：左右不明の大腿骨頭部の一部11個、脛骨体の一部1個

#### 2) 血液型

残存歯牙は歯冠部の表面のみであるので検査資料として不適合のため割受する。

#### 3) 考察

個体数：残存骨は一般に小さく数量も極めて少なく、冠形のものは1つもないで不明であるが、恐らくは1体が埋葬されたものと思われる。しかし、骨が散在していることからそれ以上の個体については不明である。

性別：性的特徴を示す部位が残存していないので不明である。

年令：残存歯牙は永久歯の萌出時期に当っており、第1大臼歯は門出（6才臼歯）

第2大臼歯と第1・2小臼歯は恐らく歯槽内にあったと推定される所から年令は小児で10～14才位と推定される。

身長：完形の4肢骨がないので不明である。

血液形：骨、歯牙とも完形のものもなく、血液型検査のための資料として不適であるので不明である。

#### 4.まとめ

本横穴墓の埋葬者数は残存骨から推定すると、確認されるのは2体であるが消失骨も多いこと、小さく骨片化した骨の散在具合からみて、それ以上の埋葬者も否定できない。

1号人骨は壮年の男性で身長不明であるが、血液型はB型である。

2号人骨は性別不明の小児で残存歯牙から年令は10～14才位と推定され、身長、血液型は不明である。

第1表 1号人骨の残存歯牙

	右	上顎	左
	○ <sup>△</sup> ⑦⑥⑤④⑧②*	* * * <sup>△</sup> ③ * ⑧⑥⑦⑧	
	右	下顎	左
	○ <sup>△</sup> ⑦⑥⑤④③②*	* * <sup>△</sup> ②③④⑧⑥⑦⑧	
○：付着歯牙		×：欠落歯牙	
○ <sup>△</sup> ：遊離歯牙			

第2表 血液型検査結果（抗体解離試験法による）

血球 抗 体		未処理血球			酵素処理血球			判定	
抗 A	抗 B	抗 O(H)	抗 A	抗 B	抗 O(H)				
1号人骨の歯牙(8J)	+	±	-	-	+	+	B	型	
対 照  血液型既知	A型歯牙	+	-	+	+	-	+		
	B型歯牙	-	+	+	-	+	+		

## 6号穴出土人骨

### 1. はじめに

中野東下谷第6号横穴墓は、島根県飯石郡三刀屋町に位置する古墳時代後期のもので、ここから成人4体の人骨が出土し、さらに床砂から乳歯（幼児1体分）と小動物の骨が検出された。出土人骨の保存状態は比較的良好である。

これら成人4体と幼児1体の出土人骨と歯牙について、性別・年令・身長・血液型・その他について報告する。

### 2. 出土人骨と動物骨の概要

横穴墓内には、玄室入口から左右にそれぞれ2体ずつ1対になって、反対方向から下肢骨が交差する状態で埋葬されている。整理の都合上これらの人骨を以下番号をつけて呼ぶこととする。（19頁図10参照）。

これらI～IV号人骨の残存骨の配列をみると、ほぼ伸展仰臥位で埋葬され、骨格順にはほぼ配列しており、骨の配列に乱れはない。

I号人骨とII号人骨との関係をみると、II号人骨の下肢骨の上にI号人骨の下肢骨が重なっている。II号人骨はI号人骨に比して骨の残存が悪い。

III号人骨とIV号人骨の関係をみると、IV号人骨の下肢骨の上にIII号人骨の下肢骨が重なった状態で埋葬されている。IV号人骨もIII号人骨に比して骨の残存が極めて悪い。

これら各1対の人骨の関係は、男と女の関係である。

その他にIII号人骨とIV号人骨の間の床砂から、位置は確定しがたいが（III号人骨に近い位置と推定）、人の幼児の歯牙（乳歯のみ）6個検出されたが骨の残存は認めない（V号人骨）。

また、位置は確認しがたいが、IV号人骨下の床砂付近（玄室中央やや奥の部位、須恵器・C群の付近）から小動物の骨3個を検出した。

### 3. 出土人骨

#### 1) I号人骨

頭蓋骨をみると右眼窩の頬骨前頭縫合部付近から右側頭骨部と頭蓋底部が大きく破損している。前頭部、頭頂部、左側頭部が残存している。

#### 2) II号人骨

頭蓋骨はほぼ完形である（右頬骨弓の一部欠損、下顎骨の関節突起を欠くが）。

第1表 残存骨一覧

		I号人骨	II号人骨	III号人骨	IV号人骨
椎骨	頸椎骨 (1~7骨)	1~7骨まで完形	3骨のみ残存では ほぼ完形	1~5骨は残存す るが6~7は欠落	欠
	胸椎骨 (1~12骨)	1~12骨まで完形	8骨のみ残存では ほぼ完形	2~12骨までほぼ 完形、第1骨欠落	欠
	腰椎骨 (1~5骨)	1~5骨まではほぼ 完形	5骨とも完形	1~5骨まで完形	欠
	仙椎骨(〃)	1~5骨まで残存	5骨とも完形	1~5骨まで完形	一部残存
	尾椎骨(〃)	欠	欠	欠	欠
	胸骨柄(1骨)	ほぼ完形	欠	一部残存	欠
郭	胸骨体(〃)	欠	欠	欠	欠
	剣状突起(〃)	欠	欠	欠	欠
	肋骨(12対骨)	左: 1~9肋骨ま でほぼ残存、そ の他肋骨片 右: 1~10肋骨ま でほぼ残存、そ の他肋骨片	左: 10骨 右: 10骨 かなりよく残存 する。	左: 約7骨 右: 約7骨 左右とも完形骨 なし	欠
	肩甲骨 (1対骨)	左右とも関節窩肩 峰、鳥口突起棘上 窩、棘下窩の部分	左右とも一部(関 節窩、肩峰部とそ の周辺骨)のみ残存	左右とも一部(肩 峰部、関節窩周辺 骨)のみ残存	右のみ一部残存
	鎖骨 (1対骨)	左: 完形 長さ 128 mm 右: ほぼ完形 長さ 126 mm	左: 遠近部とも欠 右: 近位部折損 その他ほぼ完形 約 123 mm	左のみ一部残存	右のみ一部残存
	上腕骨 (1対骨)	左: ほぼ完形 長さ 252 mm 右: ほぼ完形 長さ 258 mm	左右とも近位部欠 損であるが右は約 270 mm位と推定	左: ほぼ完形で 右: 近位部欠	左右不明の骨体部 のみ1個残存
骨	桡骨 (1対骨)	左: 欠 右: 完形 長さ 195 mm	左: 近位部欠で 約 200 mm 右: 遠位部欠で 約 196 mm	左右とも遠近両端 部欠	左右とも残存する が両端部欠の骨体 部のみ

上 肢 骨	尺骨 (1対骨)	左：ほぼ完形 長さ 210 mm 右：完形 213 mm	左右ともほぼ完形 左：235 mm 右：223 mm	右のみ残存するが 遠位部欠	左：203 mm完形 右：骨体部折損
	手骨 (1対骨)	主に右手骨で舟 状骨、月状骨、 小多角骨、中手 骨4、基節骨2、 中節骨4、末節骨 2、一部左右不 明の骨を含む。	左右不明の手根骨 3、中手骨8、基 節骨3、中節骨3	左：手根骨6、基 節骨2、中節骨2 右：手根骨4、中 手骨4、基 節骨3、基節骨4、 中節骨2、 左右の手骨はか なり残存	破損ひどく左右不 明骨残存。手根骨 4、中手骨4、基 節骨4、中節骨2 3、中節骨2、
下 肢 骨	寛骨 (1対骨)	左右とも腸骨と坐 骨残存するが、恥 骨部を欠く	左右とも完形	左右とも大きく損 壊しているが恥骨 部残存	左右とも腸骨の一 部残存
	大腿骨 (1対骨)	左：完形 長さ 368 mm 右：完形 長さ 371 mm	左右とも遠位部折 損で約 373 mmと推 定	左：遠位部わずか に破損約 370 mm 右：ほぼ完形 372 mm	左：ほぼ完形 約 410 mm 右：近位部破損 約 400 mm
下 肢 骨	胫骨 (1対骨)	左：完形 306 mm 右：完形 303 mm	左右とも遠位部折 損しているが右は 約 311 mmと推定	左：近位部欠 右：遠近部一部折 損 約 287 mm	左：完形 325 mm 右：近位部破損 約 310 mm
	腓骨 (1対骨)	左：完形 293 mm 右：欠	左右とも遠近両端 欠で中央の骨体部 のみ残存	左右とも近位部欠 右：骨体部のみ残 存	左：近位部欠 右：骨体部のみ残 存
足 骨	膝蓋骨 (1対骨)	左：ほぼ完 右：欠	左：欠 右：残存	左右とも欠	左右とも完形
	足骨 (1対骨)	左：踵骨、距骨、 舟状骨、立方骨 中足骨3、基節 骨1、末節骨1 右：踵骨、距骨、 中足骨2、基節 骨1、末節骨1	左：踵骨、距骨、 舟状骨 右：踵骨、距骨、 舟状骨、立方骨 中足骨3、基節 骨2 右：踵骨、距骨、 中足骨2、基節 骨1	左：踵骨、距骨、 舟状骨、楔状骨 3、立方骨、中 足骨2、基節骨 2 右：踵骨、距骨、 立方骨、楔状骨 中足骨2	左：踵骨、距骨、 舟状骨、立方骨 楔状骨1、中足 骨2、基節骨2 右：踵骨、距骨、 舟状骨、立方骨 楔状骨、中足骨 2、中節骨1

### 3) III号人骨

頭蓋骨は大きく破損して顔面、右側頭骨、頭蓋底部骨が欠落している。残存部位は前頭部、頭頂部、後頭部、左側頭部と左上顎部である。

### 4) IV号人骨

頭蓋骨は破片状に破損して原形をとどめていない。頭骨片は10数個残存するが部位が判別できるのは少い。判別骨片は前頭部、頭頂部と後頭部の一部である。骨質は極めて堅く、強固で厚くがっしりしている。

### 5) V号人骨

小児（幼児）の残存骨は検出されない。

残存骨一覧は別表1、測定値や判定結果は2～4表の通りである。

第2表 頭蓋骨の形態学的検査

		I号骨	II号骨	III号骨	IV号骨
イ	前頭結節	中等度に発達する	中等度に発達する	中等度に発達する	発達悪い
ロ	オルトメカピカ	やや斜角を示す	鉛直に近い	鉛直に近い	斜角を示す
ハ	眉弓の隆起	やや中等度に発達	発達していない	発達していない	不明
ニ	眉間の隆起	中等度に発達する	中等度に発達する	発達していない	不明
ホ	乳様突起	やや発達悪い	中等度に発達する	やや小さい感じ	
ヘ	外後頭隆起	比較的弱い	ほとんど隆起なし	ほとんど突隆なし	強く突隆する
ト	上項線	中等度の発達		発達悪い	よく発達している
チ	後頭平面	隆起線	中等度発達	隆起線の発達悪い	ごつごつしている
リ	頬弓巾	やや広い	やや狭い感じ	不明	
ヌ	下頸角巾	広い	やや広い感じ	やや狭い	
ル	下頸枝角	鈍角	不明		
ヲ	頤棘	後方へ強く突出	発達していない	発達が弱い	
ワ	翼突粗面の凹凸	やや強い			
カ	頤隆起	突出やや強い	発達弱い		
ヨ	頤結節	中等度に発達する	発達弱い		
タ	頤孔	左右ともP <sub>1</sub> とP <sub>2</sub> のP <sub>1</sub> とP <sub>2</sub> の中間 中間	P <sub>1</sub> とP <sub>2</sub> の中間		

第3表 縫合の癒着

		I号骨	II号骨	III号骨	IV号骨
頭 蓋	冠状縫合 迂曲部	プレグマ部 癒着度 0~1	0	0	0
	側頭部	2~3	0	0	0
					}
冠 の 縫 合	矢状縫合 頂部	プレグマ部 0~1	0	0	0
	孔間部	1~2	0	0	0
	後部	2~3	0	0	0
		2~3	0	0	0
縫 合	人字縫合 中部	三角部 0	0	0	0
	下部	0	0	0	0
	鱗状縫合	0	0	0	0
					}
口 蓋 縫 合	切歯縫合 正中部	切歯側 完全癒着	癒着痕跡程度 わずかに癒着	癒着なし	欠
	横口蓋縫合	外側部	わずかに癒着	癒着なし	欠
	正中口蓋縫合	口蓋骨部	下2/3癒着	癒着なし	欠
					}

#### 4. 動 物 骨

IV号人骨の周辺部の玄室中央付近の床砂より、小動物の骨3個を検出した。

#### 5. 血液型検査

##### 1) 資 料

出土人骨の血液検査のために、I~V号人骨由来の歯牙を用いた。

I号人骨の歯牙：左上顎犬歯 ( 13 )

II号人骨の歯牙：右上顎第2小臼歯 ( 5 )

III号人骨の歯牙：左上顎犬歯 ( 13 )

IV号人骨の歯牙：右上顎第1小臼歯 ( 4 )

V号人骨の歯牙：左上顎第2乳臼歯 ( E )

資料の歯牙を粉末化し、脱脂処理後検査に供した。なお対照として血液型既知の歯牙も同様に処理して検査に供した。

第4表 頭骨の計測値 (mm)

## 2) 抗 体

		I号骨	II号骨	III号骨
1	頭蓋骨最大長	182.0	197.0	191.0
6	後頭骨底部長	63.0		
7	大後頭孔長	33.0	35.0	
8	頭骨最大巾	—	142.0	不明
9	最小前頭巾		96.0	"
10	最大前頭巾		109.0	
11	両耳巾	114.0	113.0	
12	最大後頭巾	106.5	109.2	
13	乳様巾	109.0	102.0	
14	最小頭骨巾	37.2	51.5	
15	後頭骨底部巾	22.8	19.4	
16	大後頭孔巾	26.8		
17	頭骨高	141.0	155.0	
43	上顎巾		103.3	
44	両眼窩巾		95.0	
45	頬骨弓巾		不明	
46	中顎高		106.0	
48	上顎高		66.4	
51	眼窩巾	40.2	36.0	
52	眼窩高	33.3	31.0	
54	鼻巾	29.8	25.5	
55	鼻高	43.0	44.6	
61	上顎歯槽巾		64.0	
62	口蓋長	41.0	43.5	
63	口蓋巾	37.8	37.3	
65	関節突起巾	121.0		
65-1	筋突起巾	78.2		81.0
66	下顎角巾	98.3	106.2	101.0
67	前下顎巾(頤孔巾)	49.0	52.5	48.5
69	頤高	26.3	32.6	29.3
70	下顎枝高	56.0	不明	60.0
71	下顎枝巾	33.0	34.8	32.5

抗A・抗B血清は市販品、抗O(H) レクチンは ueex europaeus 種子の抽出液を用いた。未処理血球と鋭敏性を増すために、酵素処理血球を指示血球として供した。

## 3) 検査法

血液型検査法として現在最も鋭敏性の高い抗体解離試験法を行った。術式は慣例に従い一部改変して行った。

## 4) 結 果

結果は第7表に示す。

第5表 身長の推定

		左右	骨の長さ	安藤法(1923)	藤井法(1960)	工藤法(1961)	Pearson法(1899)
I 号 人 骨	尺 骨	左	210.0 mm	cm	147.5 cm	cm	cm
		右	218.0		150.0		
	大腿骨	左	368.0		145.6	148.0	150.4
		右	371.0		146.5	148.8	150.9
II 号 人 骨	胫 骨	左	306.0		149.7	148.0	151.5
		右	303.0		148.8	147.0	150.8
	平均 値				148.0	148.0	150.0
III 号 人 骨	上腕骨	右	270.0	144.9	145.6		146.4
	桡 骨	左	200.0	148.0	146.1		149.1
		右	196.0	143.3	144.2		147.8
	尺 骨	左	235.0	159.8	151.1		
		右	223.0	149.9	147.6		
IV 号 人 骨	大腿骨	左	373.0	143.5	144.7	149.3	138.3
		右	373.0	144.7	144.6	149.3	138.3
	胫 骨	右	311.0	148.0	146.3	149.6	146.5
	平均 値			148.0	146.3	149.4	144.4
IV 号 人 骨	上腕骨	左	253.0	141.1	141.7		141.7
	大腿骨	左	370.0	144.1	144.0	148.5	137.8
		右	372.0	144.3	144.3	149.0	138.1
	胫 骨	右	287.0	136.4	141.0	141.7	140.9
	平均 値			142.0	143.0	146.0	140.0
IV 号 人 骨	大腿骨	左	410.0	155.3	156.1	158.5	158.3
		右	400.0	151.6	153.7	156.0	156.4
	胫 骨	左	325.0	151.8	154.2	154.3	156.0
		右	約310.0	146.6	150.6	149.3	152.5
	平均 値			151.0	154.0	155.0	156.0

第6表 残存歯牙・咬耗度

			右	左	咬耗度
			8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8	
I号人骨	永久歯	上顎	× × × × × × × ×	× × $\hat{\circ}$ × ○ × × ×	マルチンの分類：2
		下顎	× ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	
II号人骨	永久歯	上顎	○ ○ ○ × × × $\hat{\circ}$ ×	○ ○ × × × ○ ○ ○	マルチンの分類：0～1度
		下顎	○ ○ ○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	柄原の分類：1°a～1°b
III号人骨	永久歯	上顎	× × × × $\hat{\circ}$ × × ×	× $\hat{\circ}$ ○ ○ ○ ○ ○ ×	マルチンの分類：0～1度
		下顎	○ ○ ○ ○ ○ ○ × $\hat{\circ}$	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	柄原の分類：0～1°a
IV号人骨	永久歯	上顎	× × × $\hat{\circ}$ ○ × × $\hat{\circ}$	○ ○ × ○ ○ ○ ○ ×	マルチンの分類：2度
		下顎	× $\hat{\circ}$ ○ ○ ○ ○ ○ ○	× ○ × ○ ○ ○ ○ ×	
V号人骨	乳歯	上顎	E D C B A	A B C D E	○：付着歯牙 $\hat{\circ}$ ：遊離歯牙 ○：未萌出歯牙～萌出中の歯牙 ×：欠落歯牙 $\blacktriangle$ ：齲歯（虫歯）
		下顎	× × × ×	× × × × $\hat{\circ}$	

第7表 血液型検査結果

(抗体解離試験法による)

血球抗体	未処理血球 酵素処理血球 判定						
	抗A	抗B	抗O	抗A	抗B	抗O	
資料			(H)			(H)	
I号人骨	-	+	-	-	#	+	B型
II号人骨	+	-	-	#	-	#	A型
III号人骨	-	#	-	-	#	#	B型
IV号人骨	-	#	-	-	+	+	B型
V号人骨	-	+	-	-	+	#	B型
対照	A型	#	-	+	#	-	A型
	B型	-	#	+	-	#	B型

第8表 乳歯の萌出と完成時期

(参考表)

左右	歯	萌出	完成時期
左	上顎第2乳臼歯	18～24ヶ月	20～22ヶ月
右	下顎乳中切歯	6～8ヶ月	16～18ヶ月
左右	下顎乳犬歯	17～18ヶ月	2年
左右	下顎第1乳臼歯	14～15ヶ月	18～20ヶ月

## 6. 考 察

### 1) 性 別

I号人骨…第2表イ、ハ、ニ、ト、チ、リ、ル、オ、ワは一般に男性骨が具備する特徴であるので男性と推定する。

II号人骨…第2表イ、ロ、ハ、ニ、ヘ、チ、カ、ヨ、オなどは一般的に女性骨が具備する形態学的特徴を保有している。さらに、骨盤をみると全体的に高さが低く、幅が広く、恥骨下角が鈍角90°で、典型的な女性骨である。

III号人骨…第2表イ、ロ、ホ、ヘ、ト、カ、ヨ、オより女性骨のもつ形態学的特徴を具備しているので女性と推定する。

IV号人骨…第2表イ、ロ、ヘ、チなど男性骨が具備する特徴を有するので、男性と推定する。

V号人骨…残存骨は全くなく歯牙（乳歯）のみ残存する。乳歯の場合、永久歯に比して性的特徴が乏しく性別推定は困難であり、現在のところ不明である。

### 2) 年 令

年令推定は頭蓋冠縫合・口蓋縫合の癒着の程度、歯牙の崩出程度・歯牙の咬耗度、その他を加味して総合的になされる。

I号人骨の年令は壮年が推定され、30才代と推定する。

II号人骨は若年者が推定され、25才前後と推定される。

III号人骨はII号人骨よりもさらに若年者と推定される。とくに、骨盤の恥骨結合面に横走する波状の溝模様がみられることから年令は20才前後が推定される。

IV号人骨は壮年（30才前後）が推定される。

V号人骨は第6表より永久歯が検出されていないことから6才以上の幼児が推定される。検出乳歯の完成は生後2年位であることから2才以上であり、その歯牙の咬耗も認められないことから2才～4.5才までが推定される（第8表参照）。

### 3) 身 長

身長推定は残存4肢骨（上肢骨・下肢骨）の最大長に各代の計算式に従って算定できる（第5表）。

手本（1972）によると縄文時代から江戸時代にかけて藤井の推定式による右大腿骨から推定した男性の身長をみると、関東地方人男性の平均値は、

縄文時代人で、約159cm

古墳時代人で、約163cm

鎌倉時代人で、約 159 cm

室町時代人で、約 157 cm

江戸時代人で、約 157 cm

近代初期人で、約 155 cm 位である。

他の文献でも、古墳時代人が最も高く、近代になるにつれて低くなっている。戦後次第に高くなる傾向がある。

山陰地方の古墳時代人の身長に関する文献的考察は現在のところできないが、これまで鑑定してきた例から関東人と大差ない身長を有している。

これらに比較して本横穴の男性人骨（I号人骨：148～150 cm位、IV号人骨：約154 cm位）は低い。

今後山陰地方の古墳時代人の例数を増やし、さらに地域性を加味して検討してみたい。

#### 4) 血液型

第7表に示すように、I、III、IV、V号人骨はB型、II号人骨はA型と判定された。

I号、II号人骨は男女であり、III号とIV号人骨も男女であり、下肢骨を交差する状態で埋葬されるなど、かなり密接な関係が推定され、年令的にみても夫婦関係が一応想定される。

とくに興味をひくのは、仮りにIII号とIV号人骨が夫婦関係にあったとすると同じ場所からV号人骨の乳歯が検出され、III号人骨（女）B型、IV号人骨（男）B型の父母から生まれる児の血液型はB型かO型であり、理論的には一応肯定される結果である。

文献的にも陳旧資料（骨、歯牙）から血液型検査を行うと、B型がやや多く検出される傾向がある。現在のところ原因として獲得抗原、その他が考えられるが不明である。現段階としては血液型検査法の改善がなされない限り、眞の血液型は究明できないが、しかし、最善の努力を払い、積極的に検査する姿勢こそ肝要と考える。

#### 5) その他

①小動物骨 これは哺乳動物の骨ではなく、他の小動物骨であるが、骨質が極めてうすく、骨髓部が比較的大きく空洞化していることから（現在のところ同定されていないが）、鳥類の4肢骨であろうと推定している。

この鳥は愛玩動物であったのか、祭祀用に使用されたのか今後の検討に待ちたい。

②残存骨の異常の有無 I号人骨～IV号人骨の残存骨には、特記すべき疾患、異常を認めない。

歯牙の疾病として、IV号人骨の歯牙にのみ齲歯（虫歯）が4個検出された。

③埋葬順序　　I号人骨（男）とII号人骨（女）の関係をみると、II号人骨の下肢骨の上にI号人骨の下肢骨が交差する状態で埋葬され、骨の配列が乱れていないことから、II号人骨の方が先に埋葬されたものである。

III号人骨（女）とIV号人骨（男）との関係をみると、IV号人骨の下肢骨の上にIII号人骨の下肢骨が交差する状態で埋葬され、骨の配列が乱れていないことから、IV号人骨の方が先に埋葬されたものである。

II号人骨（女）とIII号人骨（女）の埋葬順序は不明であるが、同一横穴墓内での骨の残存状態の良否の関係では、III号人骨の方が全般的に良好であることから後で埋葬されたものと推定する。

V号人骨（幼児）の埋葬順序は不明であるが、III号人骨（女）が母親らしいことから、前後して死亡したものと推定される。

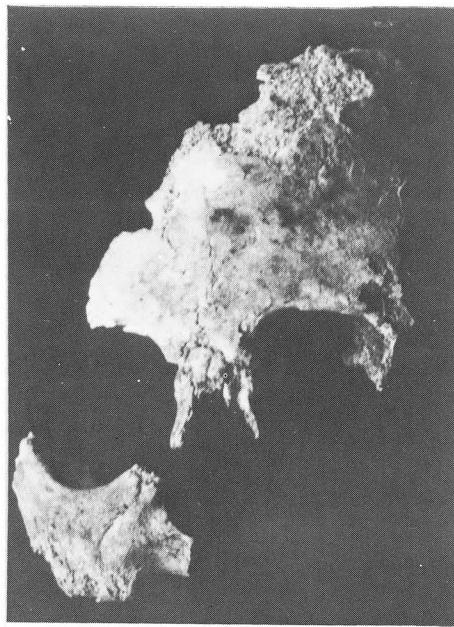
I号人骨（男）とIV号人骨（男）との埋葬順序は不明であるが、I号人骨は骨の残存状態が極めて良好なのに比して、IV号人骨は本横穴中最も骨の残存状態が悪い。そして、IV号人骨はとくに副葬品を有しており、主被葬者と考えられることから一番最初に埋葬されたものと推定される。

I号人骨（男）とIII号人骨（女）の埋葬順序は不明であり、両者の骨の残存状態も極めて良好なことから、相前後して死亡したものと推定される。

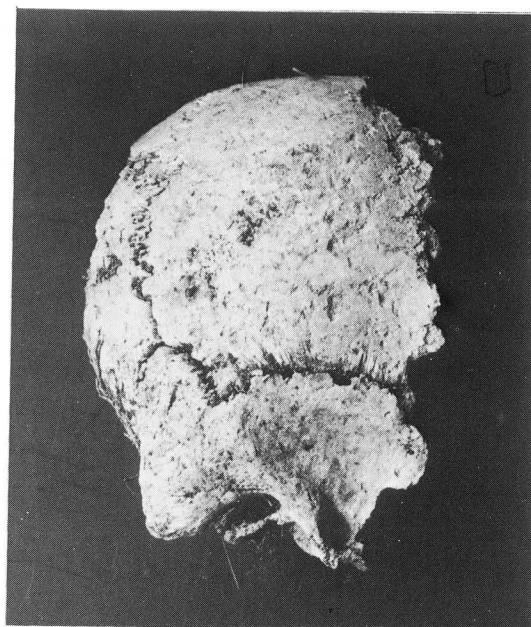
## 7. ま と め

中野東下谷第6号横穴墓内には、人骨5体と小動物骨が埋葬されていた。

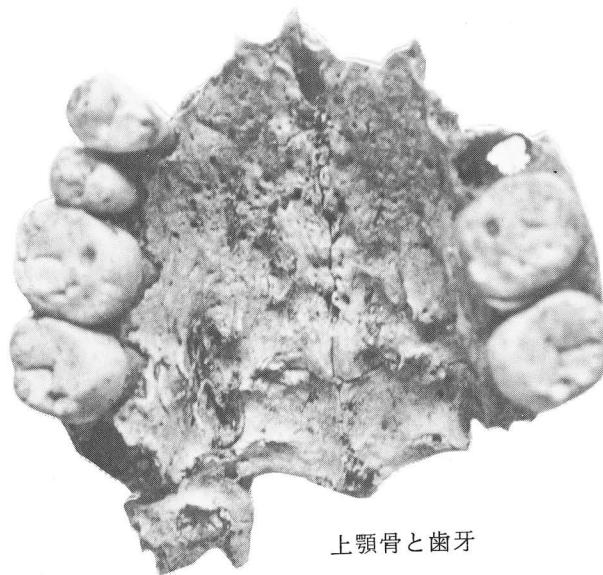
- 1) I号人骨は男性、年令は壯年で30才前後で、身長は約148～150cm位と推定され、血液型はB型である。
- 2) II号人骨は女性、年令は25才前後で、身長は約147cm位と推定され、血液型はA型である。
- 3) III号人骨は女性、年令は20才前後で、身長は約143cm位と推定され、血液型はB型である。
- 4) IV号人骨は男性、年令は壯年で30才前後で、身長は約154cm位と推定され、血液型はB型である。歯牙には齶歯が4個検出された。
- 5) V号人骨は幼児で、性別、身長ともに不明、年令は乳歯の萌出程度から2～4・5才位と推定され、血液型はB型である。
- 6) I号人骨とII号人骨とは男女の関係であり、下肢骨を交差する状態で埋葬されている。III号人骨とIV号人骨との関係も同様に男女関係で夫婦関係が想定される。
- 7) III号人骨（女・B型）とIV号人骨（男・B型）が夫婦関係だと仮定すると、V号人骨（幼児・B型）の親子関係も成立する。
- 8) 小動物骨3個が検出され、鳥類の4肢骨と推定されるが、これは愛玩動物であったのか、祭祀用に供されたのか不明である。



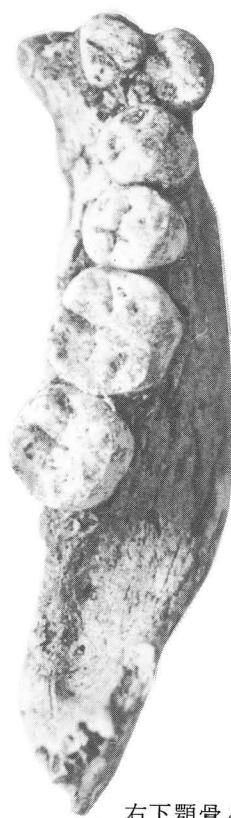
頭蓋骨（正面觀）



側面觀



上顎骨と歯牙

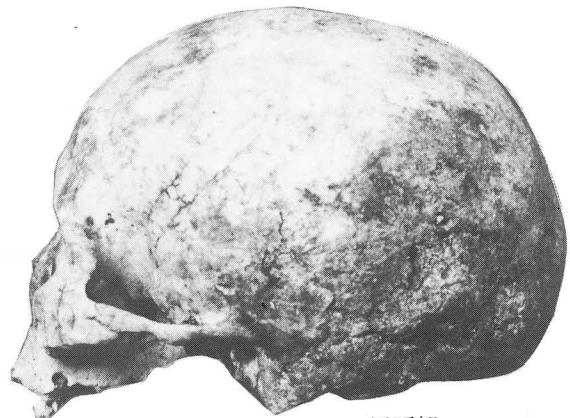


右下顎骨と歯牙

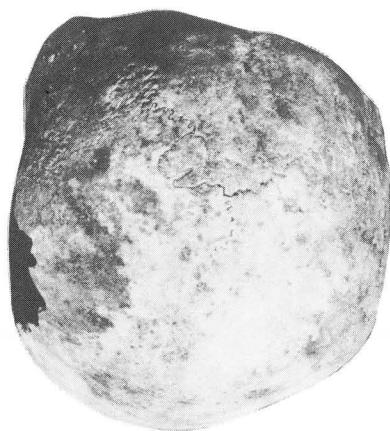
東下谷 5 号穴 I 号人骨



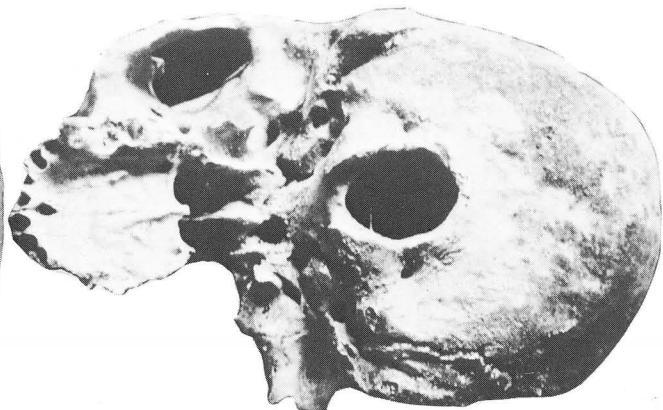
正面觀



側面觀



上面觀



下面觀



下顎骨（正面觀）

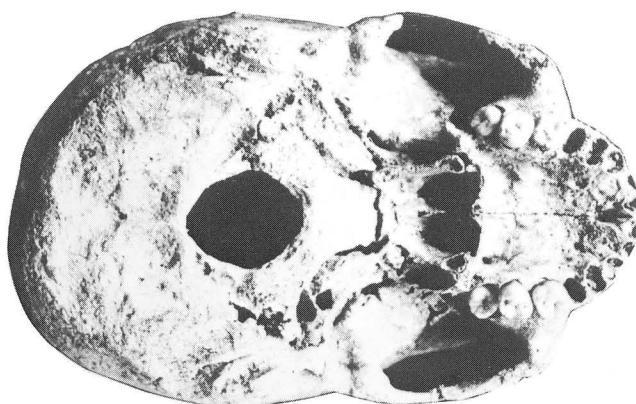
東下谷 6 号穴 I 号人骨



側面觀



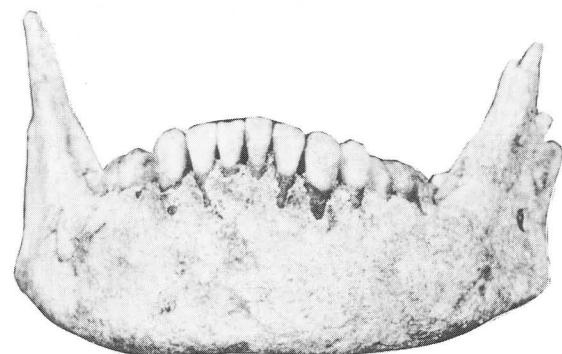
正面觀



下面觀

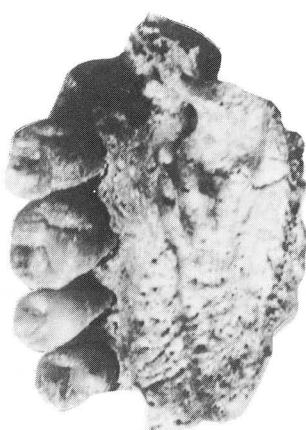


下顎骨（上面）



下顎骨正面觀

東下谷6号穴 II号人骨



左上顎骨と歯牙



頭蓋骨上面觀



下顎骨（上面觀）



側面觀



下顎骨（正面觀）



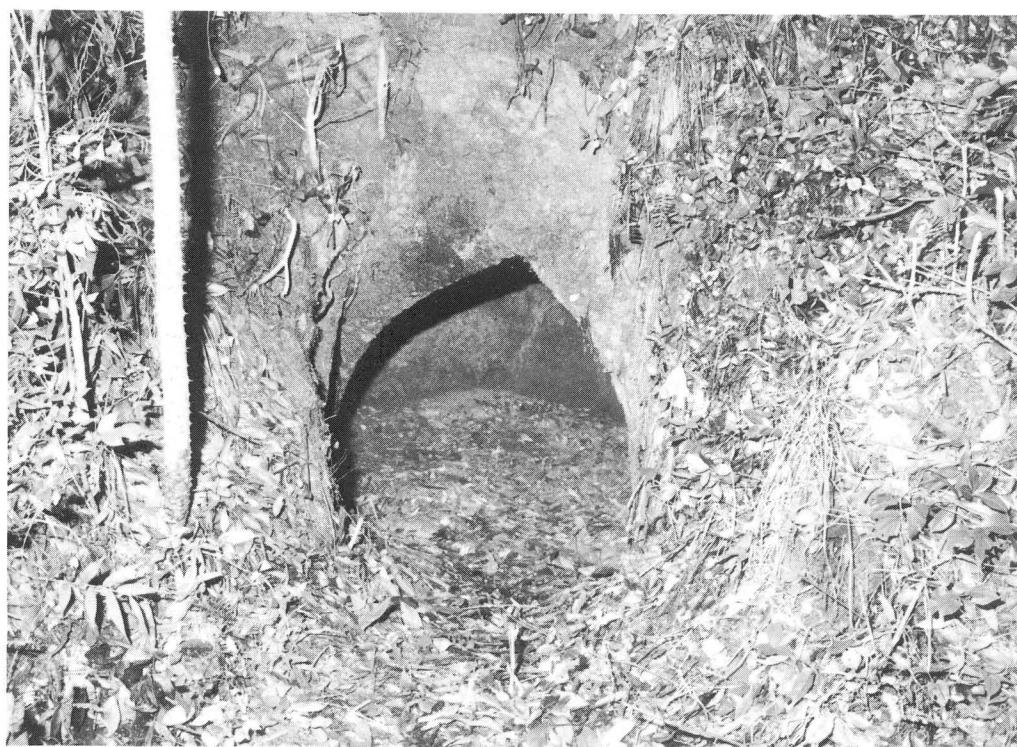
鳥骨

東下谷6号穴 III号人骨、鳥骨

# 図 版



東下谷横穴群遠景 南より



東下谷1号穴 羨門

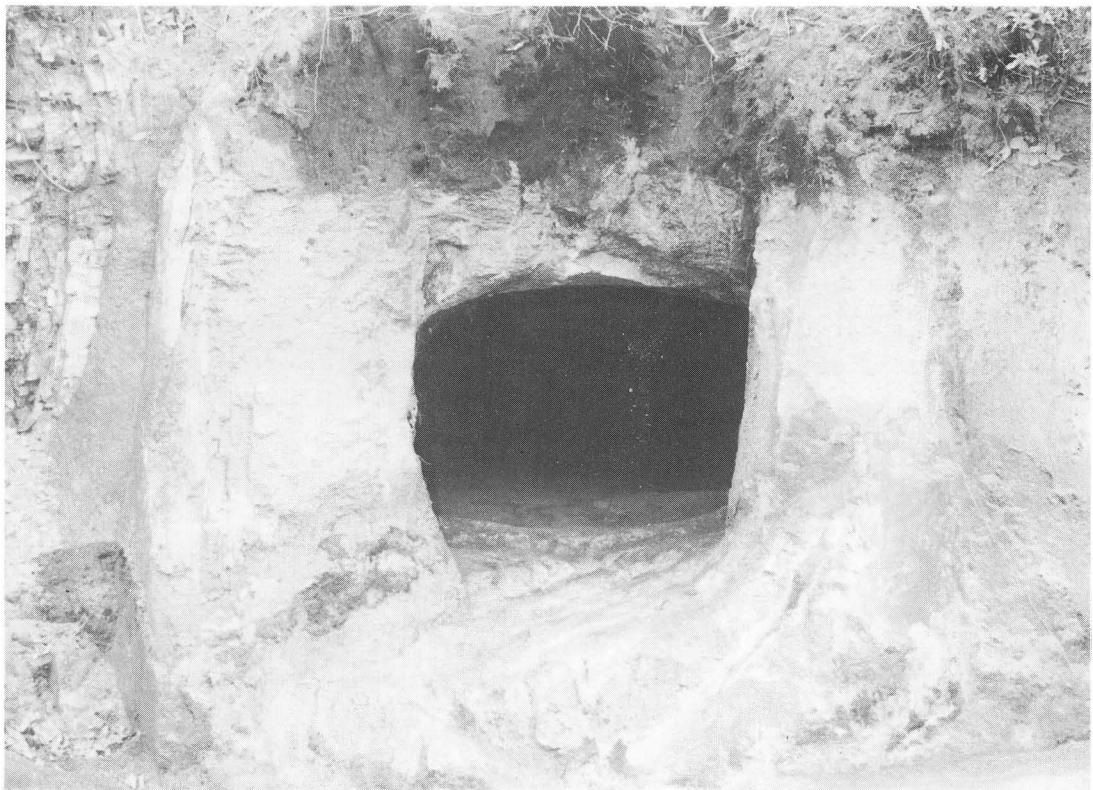
PL 2



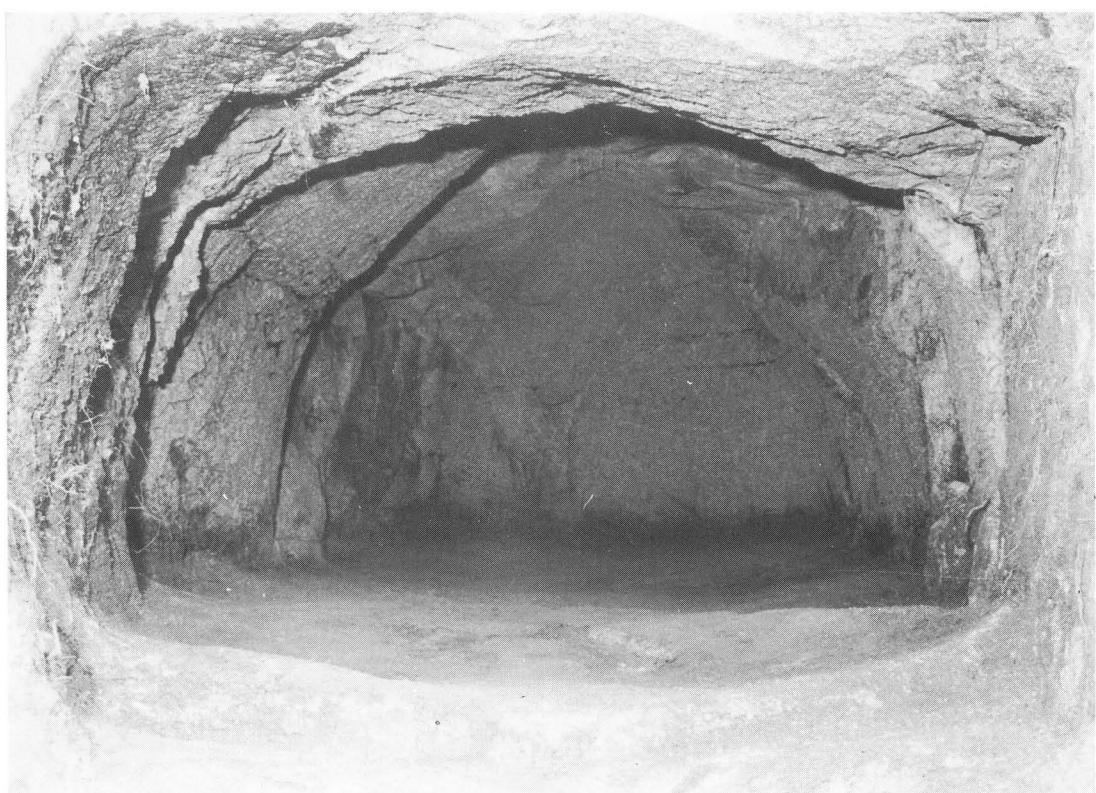
東下谷1号穴 玄室



東下谷3号穴 羨門



東下谷 4号穴 義門



東下谷横穴 4号穴 玄室

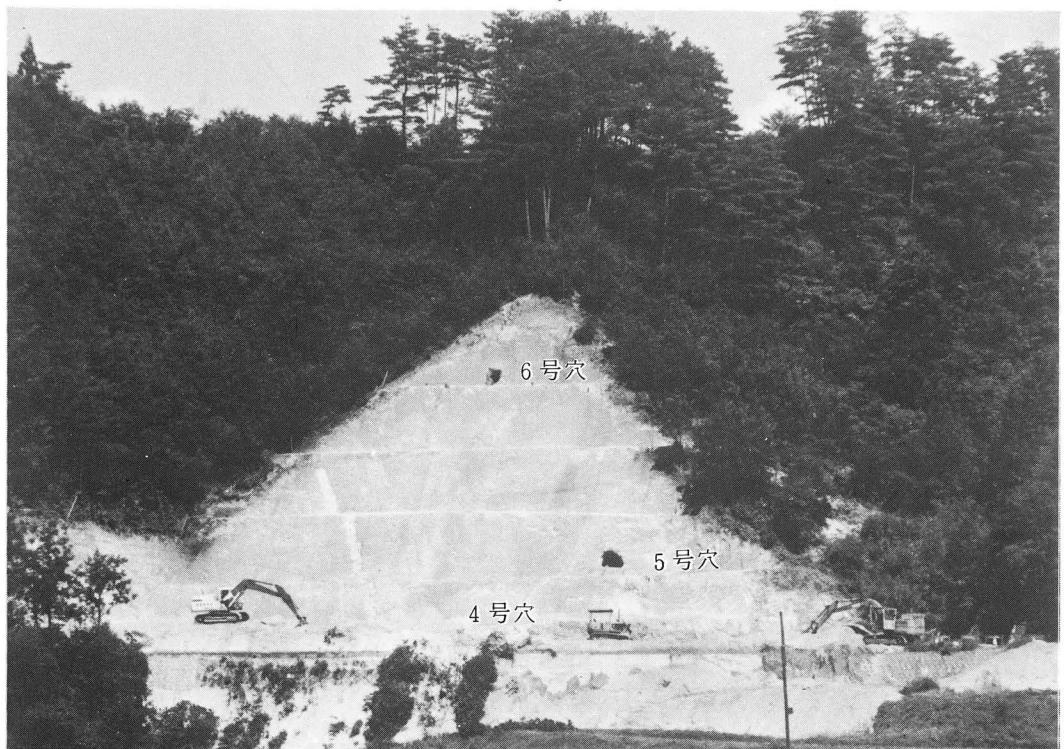


東下谷5号穴 羨門



東下谷5号穴 玄室

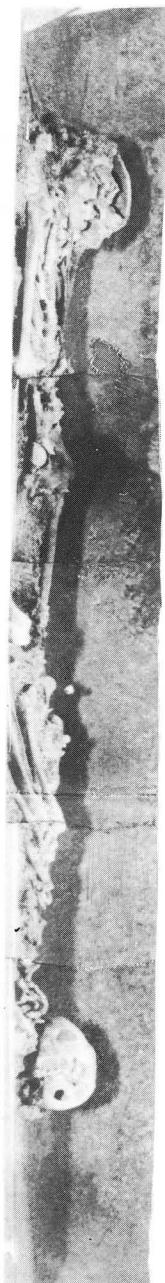
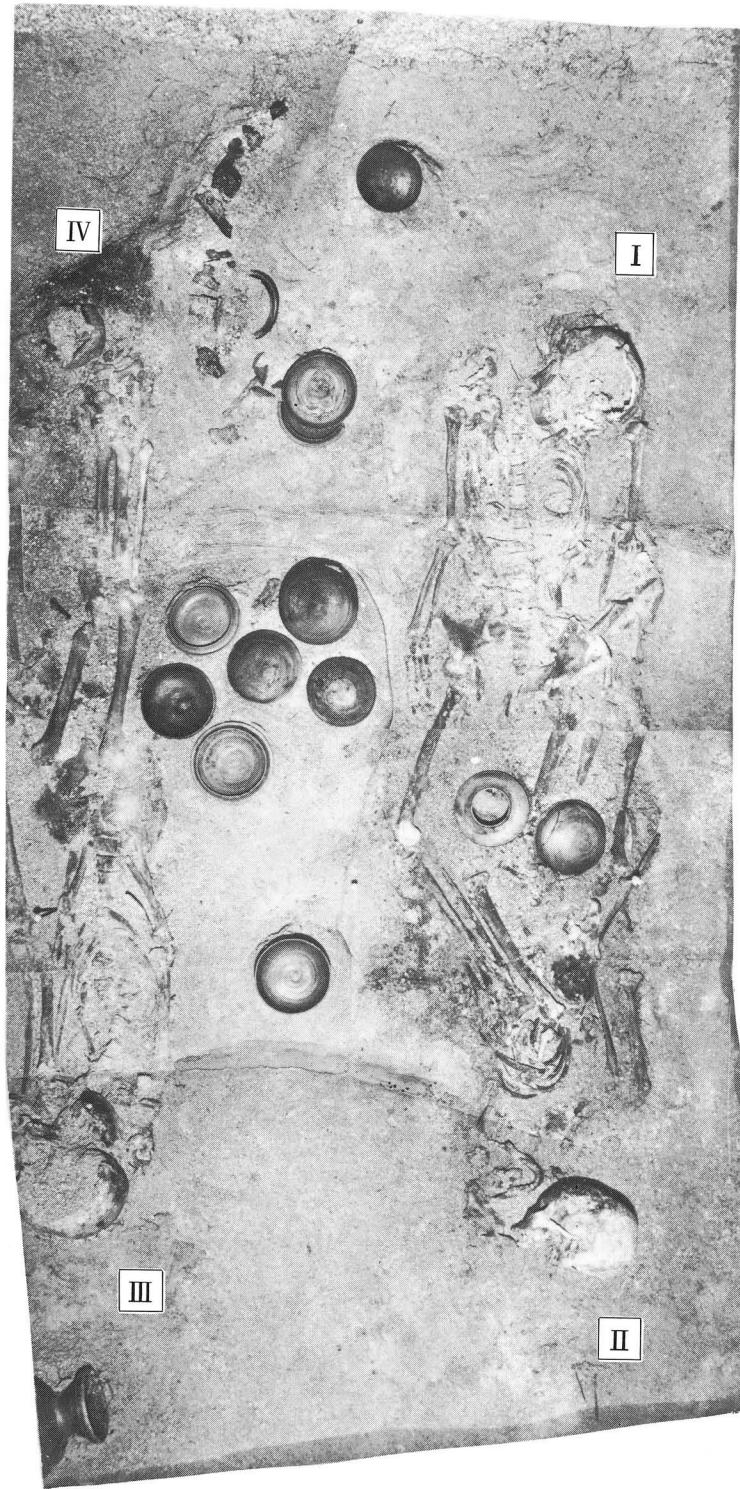




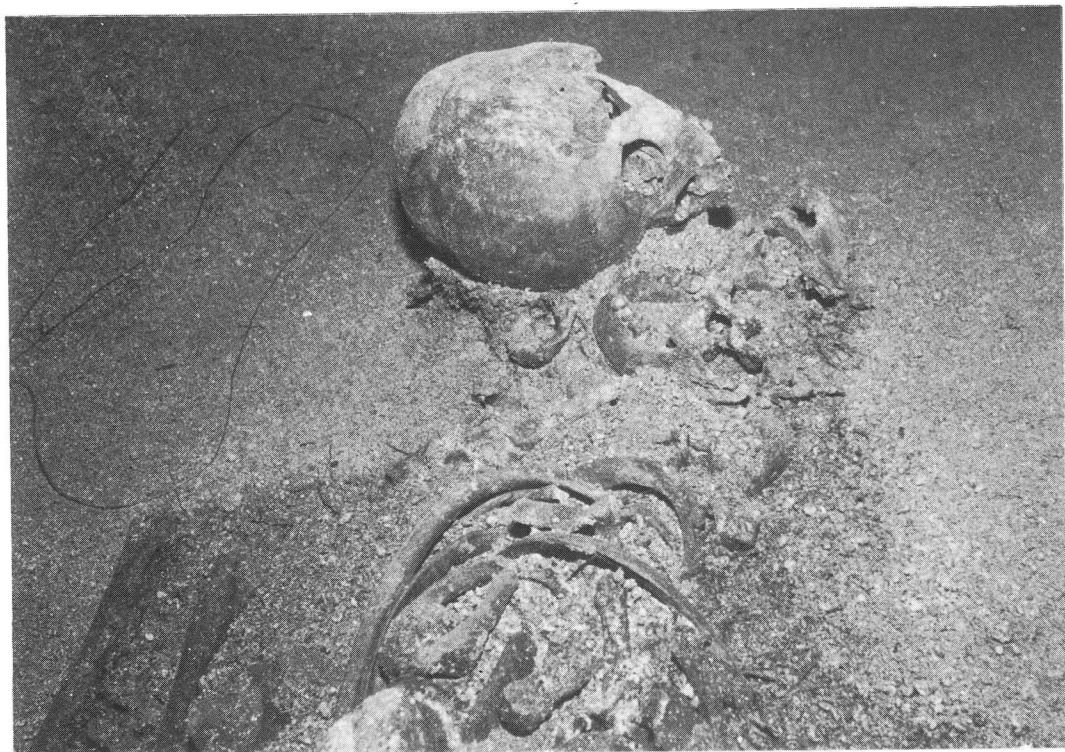
東下谷横穴群遠景



東下谷 6号穴 玄室遺物出土状況



東下谷 6 号穴 玄室内俯瞰及び側面



東下谷 6 号穴Ⅱ号人骨



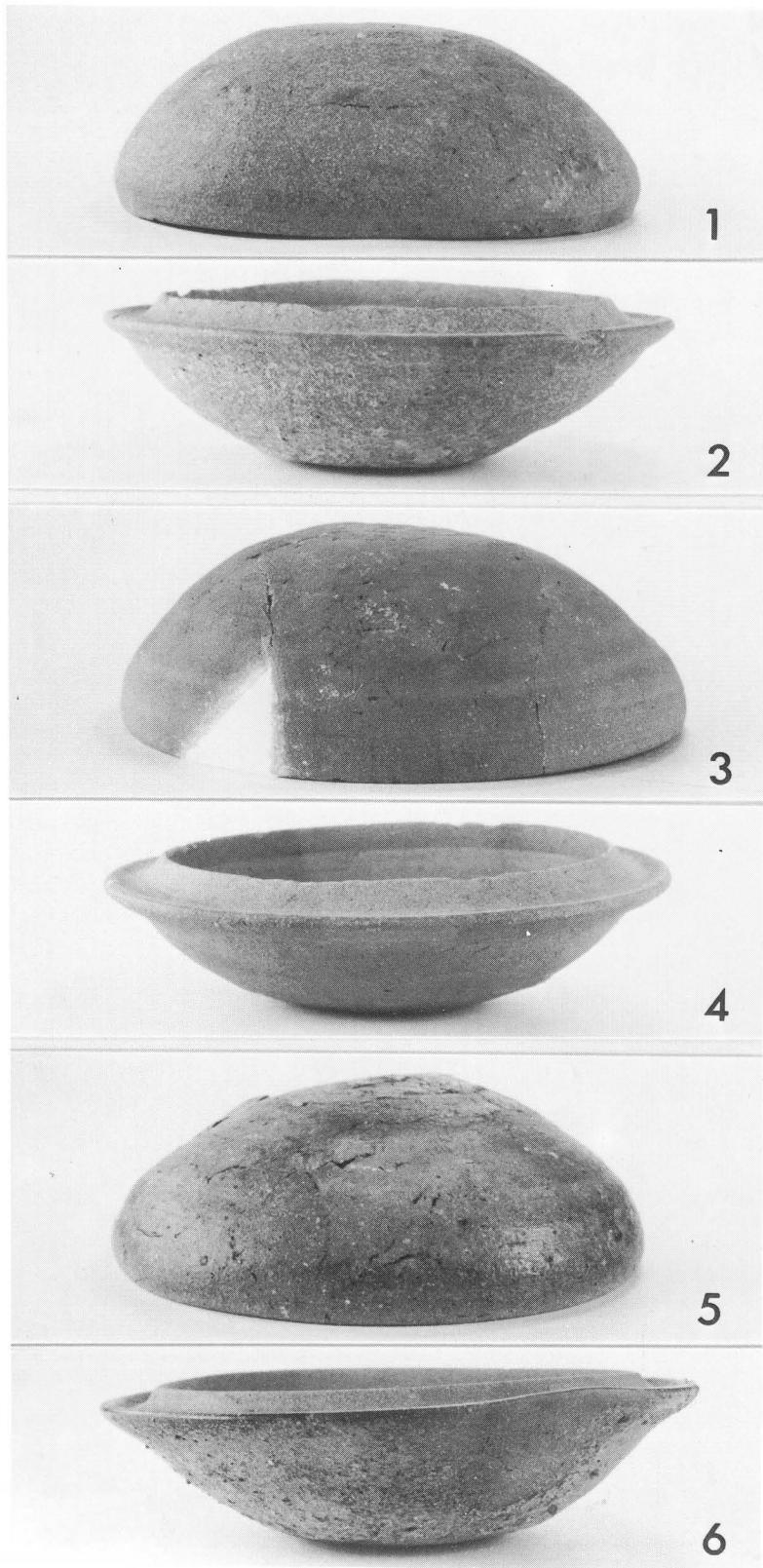
東下谷 6 号穴Ⅰ号人骨



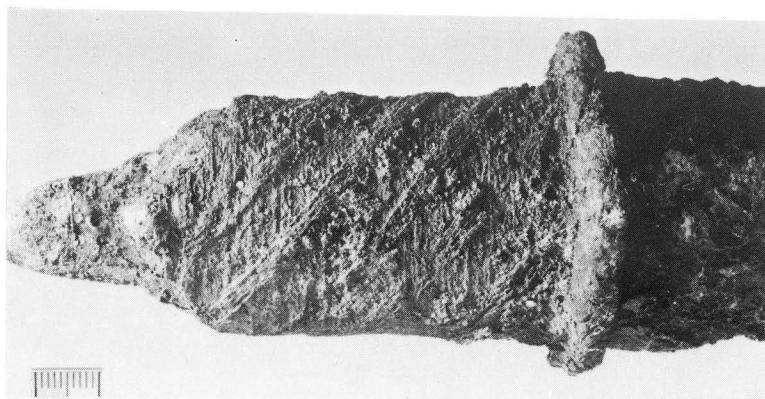
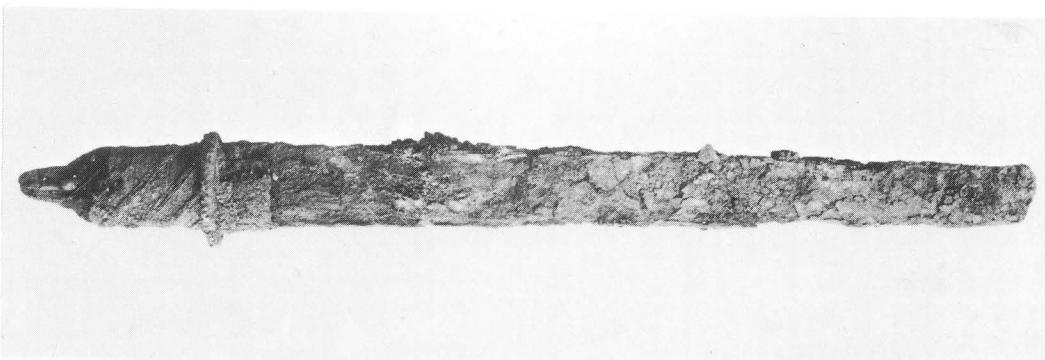
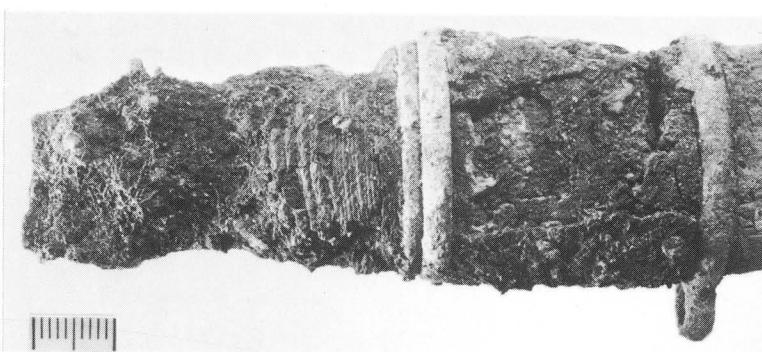
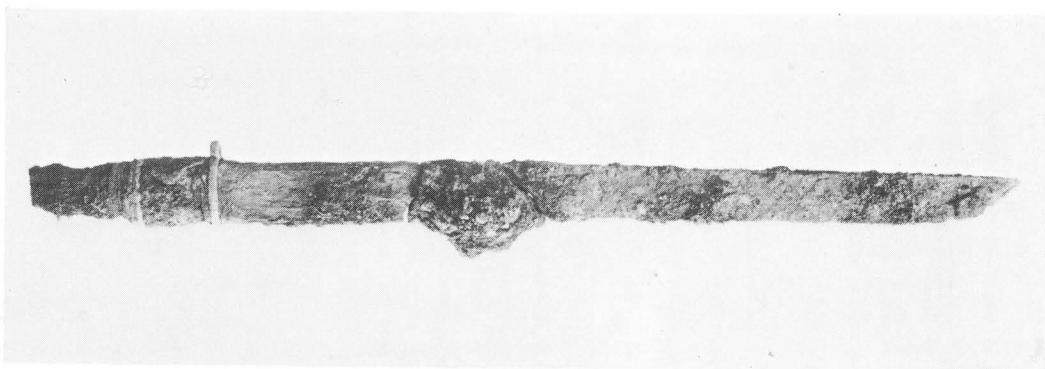
東下谷 6 号穴Ⅲ号人骨



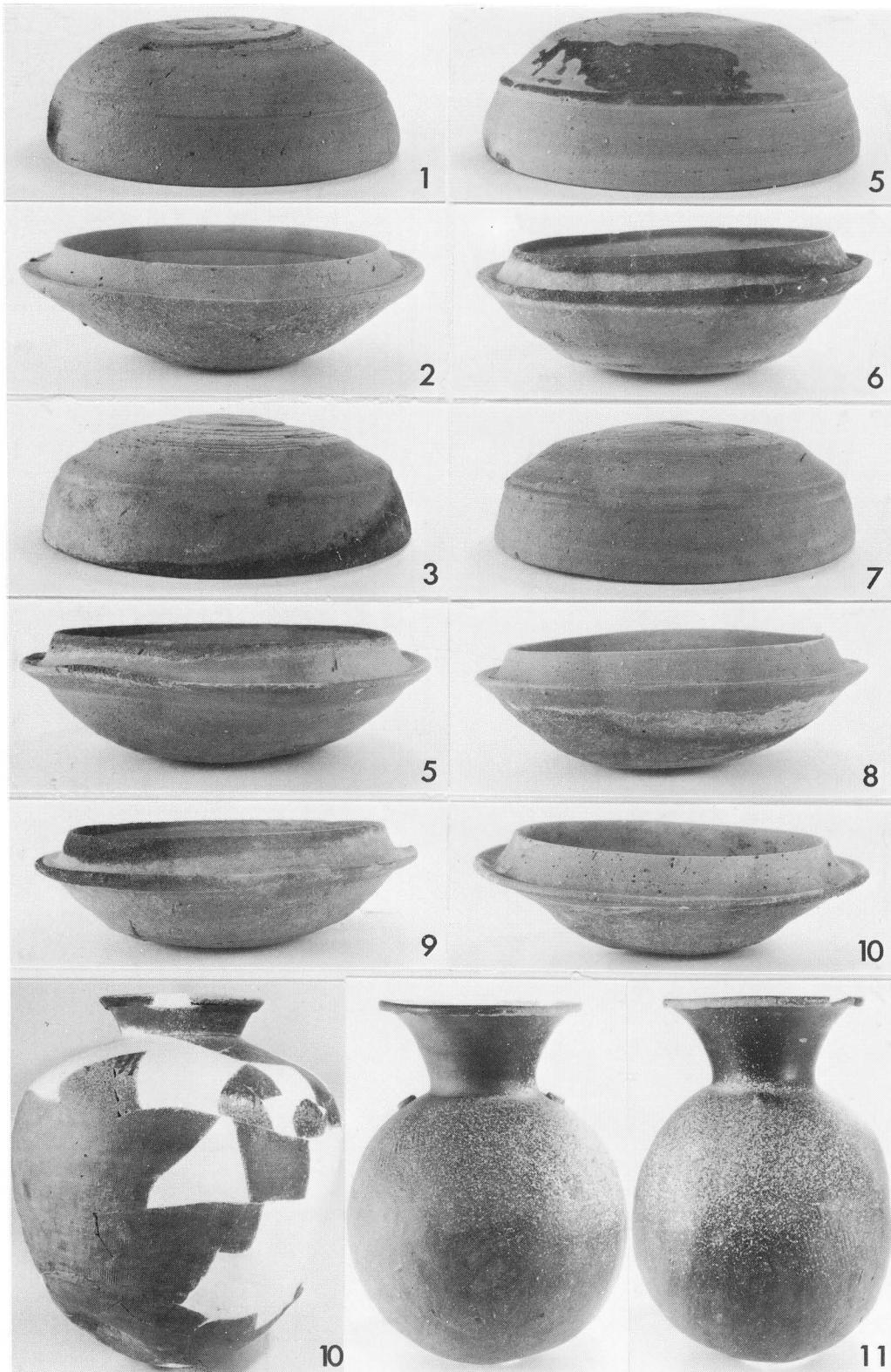
東下谷 6 号穴Ⅰ号人骨



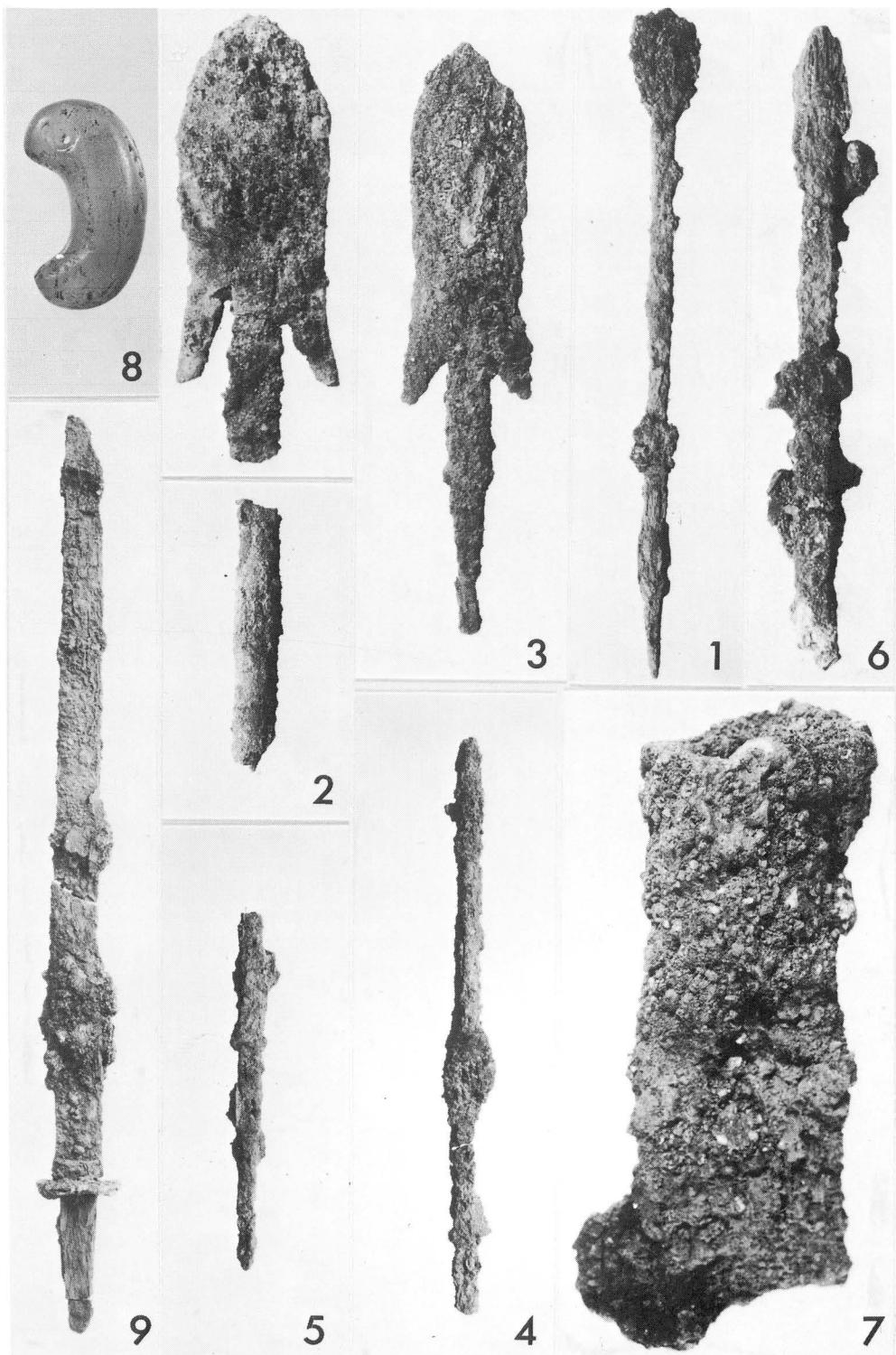
東下谷 4 号穴 出土遺物 1



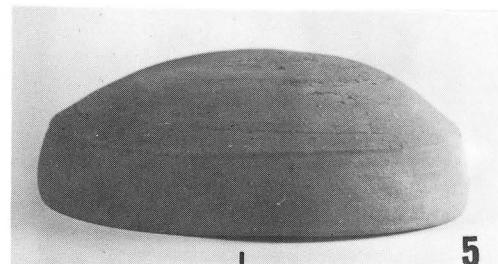
東下谷 4 号穴 出土遺物 2



東下谷 5 号穴 出土遺物 1



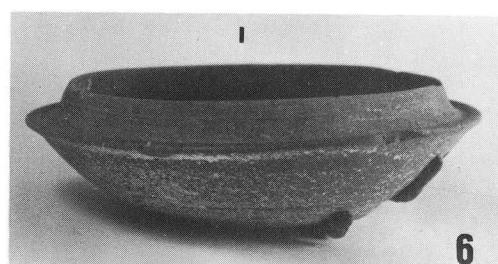
東下谷 5 号穴 出土遺物 2



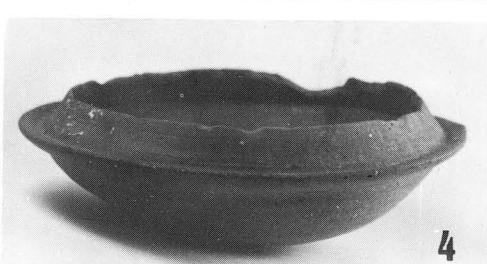
5



7



6



4



2



8



1



9



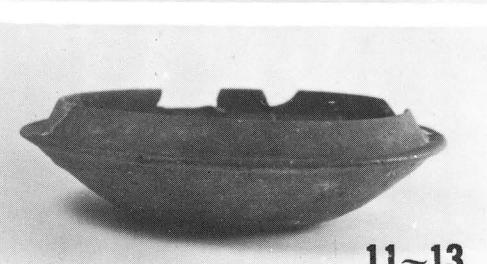
18



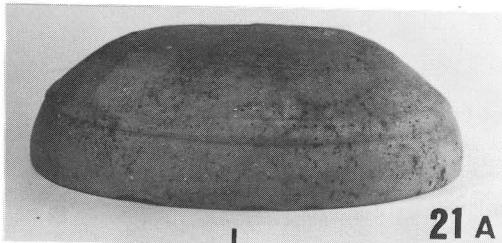
10



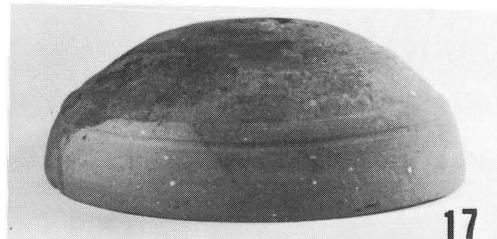
3



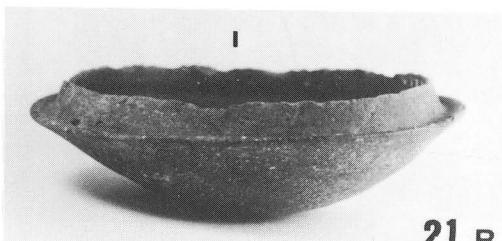
11~13



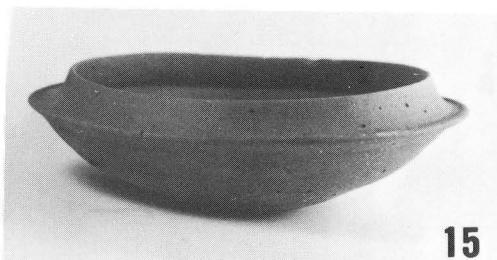
21 A



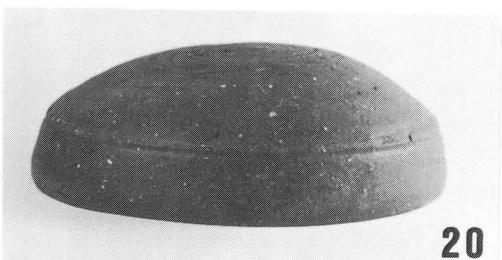
17



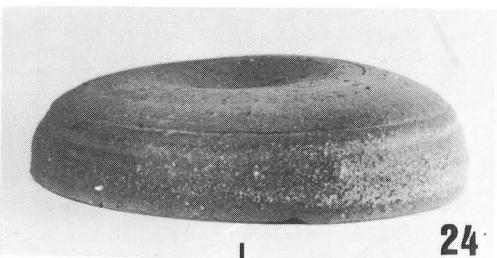
21 B



15



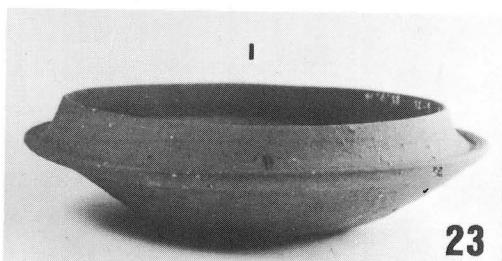
20



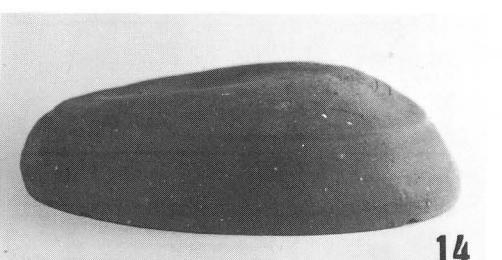
24



16



23



14



22



19



25

27

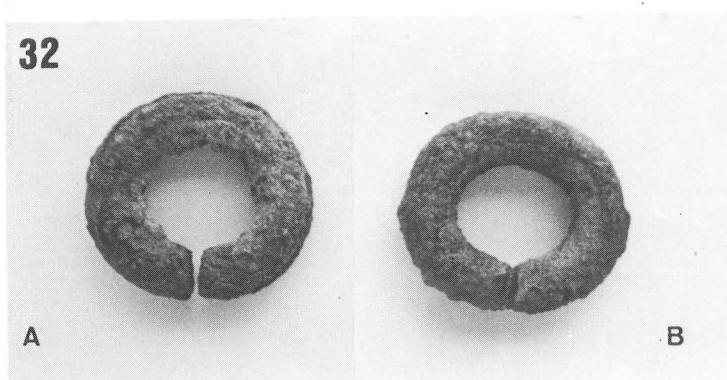
31

29

30

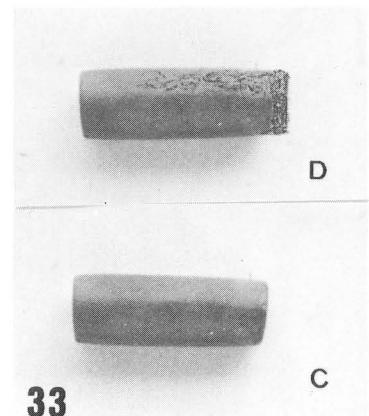
28

32



B

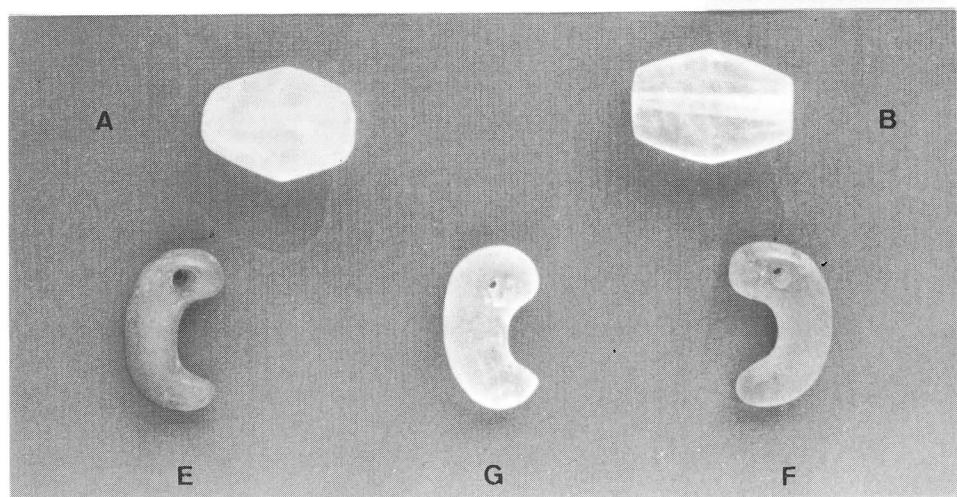
A



D

C

33



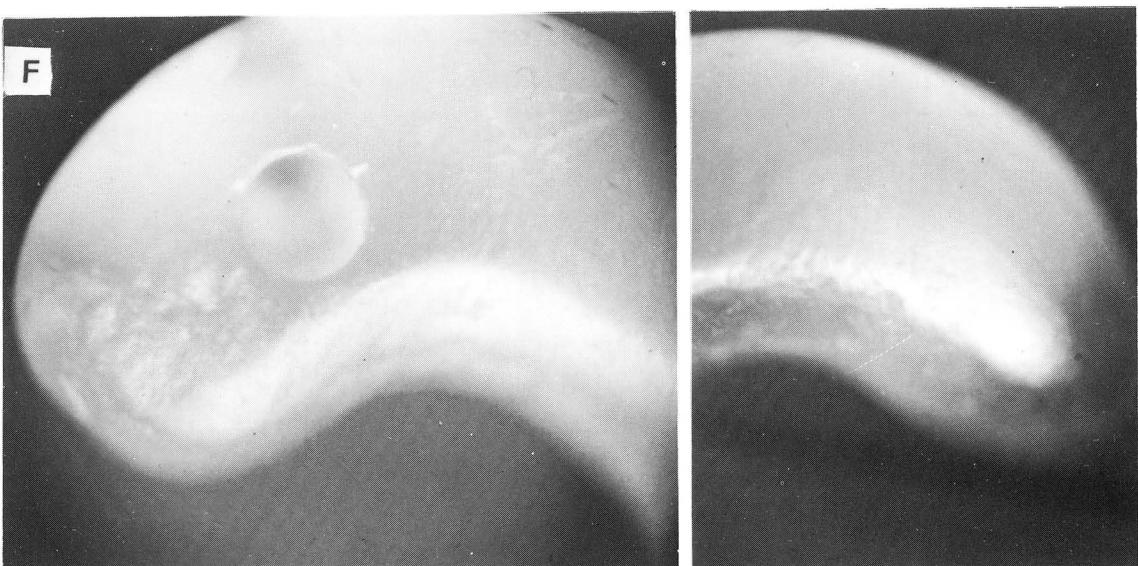
G

E

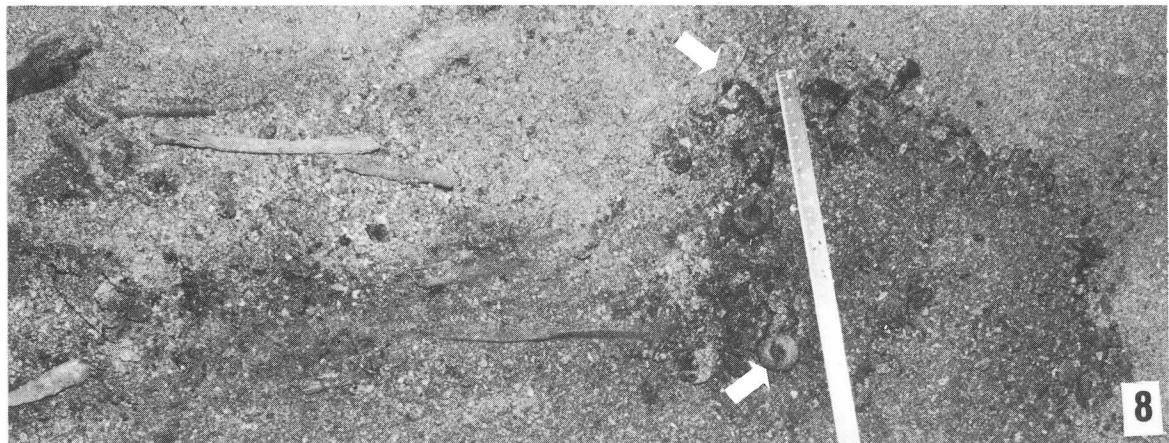
F

F

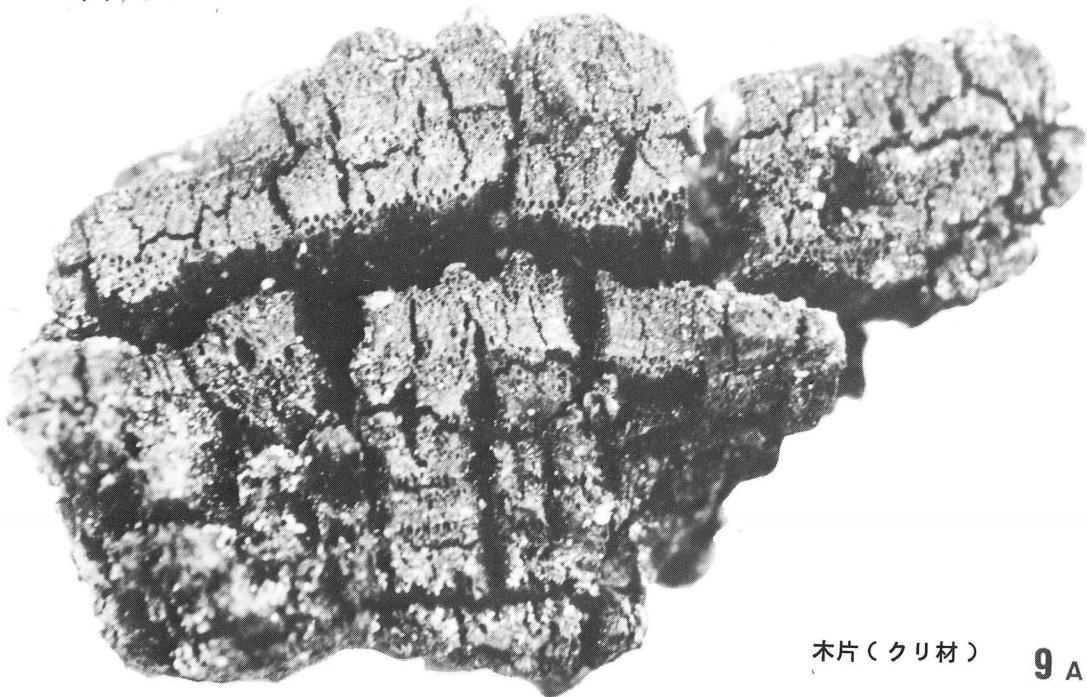
G



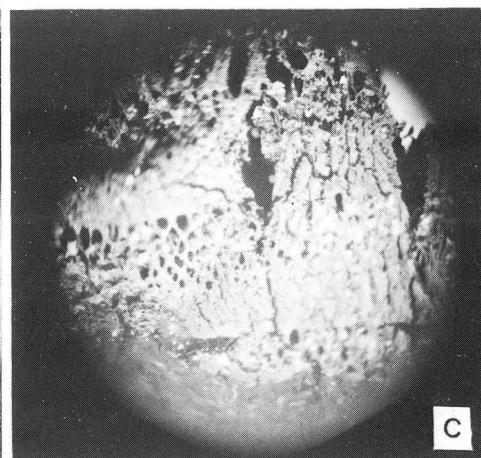
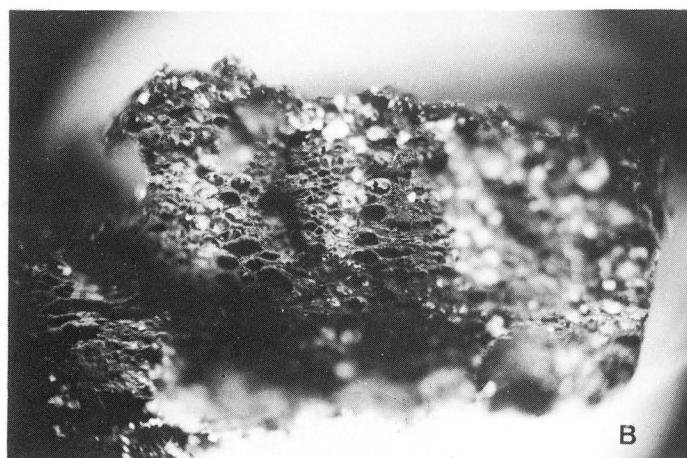
東下谷 6 号穴 出土遺物 4



耳環 挿出状況



木片（クリ材）



東下谷 6 号穴 出土遺物 5

東下谷横穴群発掘調査報告書

1984年3月

発行 三刀屋町教育委員会

印刷 (有)木次印刷

